葱間・トリップ

黄玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
葱間・トリップ

【Ｎコード】
Ｎ６８５６Ｙ

【作者名】
黄玉

【あらすじ】
「葱？」「葱だね」「葱ですね」「葱だよ」　ネギまの二次です。
主人公は相変わらずのチート能力を持って、ネギまの世界にトリップ。

主人公は原作知識薄い、というか皆無。

第零話（前書き）

続編みたいなもんです。

楽しんで読んでもらえたら幸いです。

第零話

「手続きが完了したよ」

「あぁ……やっとか。」

「随分お疲れのようだね」

「何があったか知ってるだろうが。」

「ははは、当然じゃないか」

「……くたばれ。」

「冥界は今、ギゼン君が統治してるんだよ？
全くハデスやヘルにイザナミは何をしてるんだか」

「お前の地位がいまいち解らんのだか？」

「すごーーーく偉いと思ってればいいよ」

「そうかい。」

「しかし、ギゼン君は遅いね
冥界の仕事をある程度片付けてるから仕方無いのかもしれないけど
……」

「ギゼンは神の領域に踏み込んでるのか？」

「踏み込んでる処か、どっぷりと浸かってるよ」

「俺は？」

「君もだよ
それに、色んな神の加護を受けちゃってさ、僕の能力要らないんじゃない？」

「ミーちゃんの剣も神剣にまで昇華させたしなぁ。」

「『や』
『久しぶり』」

「お久しぶりです。」

「来たね」

「二人とも久しぶり。」

「じゃあ、君たち三人を送るよ
送る先はネギまという物語の世界
全員、原作に関わりを持たせるから、原作ブレイクとか気にしなくていいよ」

「ネギマ？」

「細かい説明は面倒だから省くけど、なんとか対応してね
それじゃ、行ってらっしゃい」

パカッ

地面に穴が空くが

「……（バサバサバサバサ）」

「そいえば、飛べたね
でも、どーん！」

結局は落とされたよ。

第一話（前書き）

主人公は死んでいないので、転生ではないですよね？

第一話

どうも、カズキだ。ただいま現在進行形で墜ちている。

神が手を施したのか羽で飛ぶことが出来ないのでただ墜ちているのだ。

しかし、落下時間が長い。

もう、三分程墜ちているだろう。

成層圏から落とされたのだから当然かもしれないが……

ぼんやりと墜ちていたら携帯が鳴った。

「メールか……何々？

【ｆｒｏｍ，神

ごっめーん（詫）

ちょーーっとだけ時間軸間違えちゃった（笑）

君たちを中生代それも三畳紀の終わり、ジュラ紀始まり位に送っちゃった（笑）

御詫びにそっちの世界で生まれる筈の魔法書とか魔法球とか魔法発動体とか送ったから活用してね（爆）

じゃ、がんば（哀）】

……」

ジュラ紀……

人類の出現が大体４５０万年前……ジュラ紀の始まりが２億年前……

「ネギマってどんな物語なんだ？」

ドゴーーン！！

どうやら、地面に墜落したらしいな。

「よっと」

地面には小規模のクレーターが出来てしまったが、体にはなんの問題もないな。

「さて、これからどうするか。」

辺りをみるとシダ植物やイチョウ等の裸子植物で被子植物は見当たらない。

「どうやら、本当に古代らしいな。」

ズシン　ズシン　ズシン

「恐竜か…？」

地響きをたてながら現れたのは、逞しい後ろ足、鋭い爪と牙、明らかに俺を捕食する気満々の瞳を持つ肉食恐竜。

「イビ〇ジョーって…こんな感じだったなぁ」

異世界初の遭遇者が肉食恐竜なんだから現実逃避ぐらいさしてくれよ。

「GYAOOOOOOOOOOOOOOO」

「はぁ……」

神剣を抜いて、イビル〇ョーの首を一斬で切り落とす。

「恐竜……旨いのかな？」

そこらの石を錬金術で調理台にして、木を集めて赤火砲で火をつける。

「尻尾でいいか？」

尻尾を輪切りにして調理台に二つ並べる。

「そろそろ焼けたかな？」

木を錬成して造った箸で恐竜の肉をひっくり返しながら呟く。

「いただきます」

食べてみれば、少し筋っぽく固いが食べれないほどではないな。

味も悪くないな。

「ごちそうさまでした」

恐竜肉も結構いけるな。

さて、本格的にどうするか？

「とりあえず、魔法書やら魔法発動体やら魔法球やらを確認してみるか」

しかし、ギゼンやアンラは何処にいったんだ？

同一箇所にとばされるとは限らないから仕方無いのか？

ぼっちとか言うなよ。

はっ、変な電波をした。

これが魔法書だな。

内容は……

魔法の詠唱内容と魔法名、後簡単な効果説明が系統ごとに書かれていた。

「魔法の発動には発動体が不可欠である……この指輪がその発動体か。」

先ずは初心者用の呪文から……この世界の魔法に必要な魔力を感じることからだな。

「ごほん…えー……プラクテ・ビギ・ナル‘火よ灯れ’」

‘……’

「まぁ、最初だしな……プラクテ・ビギ・ナル‘火よ灯れ’」

‘……’

「プラクテ・ビギ・ナル‘火よ灯れ！’」

‘……’

「プラクテ・ビギ・ナル‘火よ灯れーーー！！！！’」

‘……’

「プゥラァクゥテェ・ビギ・ナルゥ‘火よ灯れーーーーーー！！！！！！’」

‘……’

もう嫌だ。

「よし、目先を変えてみよう。」

「プラクテ・ビギ・ナル‘風よ’」

‘……’

「プラクテ・ビギ・ナル‘風よ’」

‘……’

「プラクテ・ビギ・ナル‘風よ！！’」

‘……’

これもか……

「ザケル」

手からちゃんと雷撃が放たれた。

「……要練習だな。」

幸い時間は腐るほどある。

魔法球の方は……取説付きか。

「えー…何々？

中に物を入れれる。

人も入れる。

外と中との時間差をある程度いじれる。

中は結構広い。

中は魔力が満ちているので魔法の練習にオススメ。

太陽もある。

地形もある程度なら変えれる。

入ろうと念じれば大体オッケー。

ｅｔｃ、ｅｔｃ。

詰まる所、収納球だな。
野球の硬球位のサイズだけど……入るのは後でいいか。」

確認も終わったし、先ずは拠点となるところ探さなきゃな。

水場の近くで、雨も防げる。
洞窟でも探すか。

目的も決まったし。

この世界では自分の好き勝手に面白おかしく暮らさせて貰おうかね。

ほとんど不老になってるしな。

「あ、マスターとアネリアさんからもらった餞別まだ見てねぇや。」

マスターの方は……これは隊長羽織？しかも長袖。

背中には鐘をモチーフにした福音の鐘のギルドマーク。

「これは凄いな。」

早速着てみる。

「サイズぴったりだな。
アネリアさんのは、っと。」

着流し

「こっちを先にあけるべきだったな。
しかし、二つでワンセットか。いつ示し合わせたんだ？」

サイズはこっちもぴったりでした。

第一話（後書き）

主人公に魔法の才能はありません。

時間を掛ければ極める事は出来ますが、あくまで才能は全てにおいて凡人並みです。

第二話（前書き）

原作が程遠い。

第二話

「結局使えたのは影と無だけか。」

あれから練習を重ねること千数百年。

影属性と無属性は極める所まで究めてしまった。

のだが、それ以外の属性はうんともすんとも反応しなかった。

「これも才能なのかね？」

影属性は自分の影を媒介にして影に形を与える魔法だ。

影を槍にすることも使い魔にすることも出来る。

無属性は身体強化や念話、飛行、治癒、等々出来る万能属性であるが、基本属性で大概誰でも使える属性だ。

「魔法球も改造もとい、改装し終わったし……恐竜や始祖鳥を捕まえて、中に入れておくか……絶滅させるのも勿体無いし。」

魔法球の中はかなり広く、それを街エリア、草原エリア、丘陵エリア、密林エリア、沼地エリア、雪山エリア、砂漠エリア、洞窟エリア、遺跡エリア、火山エリア、渓谷エリア、古塔エリア、海辺エリアに分けている。

現在、古塔エリアにはフェニを海辺エリアにはレヴィを放している。

何を入れてもあの二体がそこの主になるだろう。

そうと決まれば、世界中を回りながら生態系に配慮して恐竜達を魔法球に入れ続ける。

「あ、アンモナイトも入れとこ。
……海中の生物は面倒だな。」

恐竜を集めたり、植物を集めたりしていて思った。

「一人だけは退屈だ。」

そこで。

「七つの大罪の結晶と義骸技術と錬金術を注ぎ込み人造人間（ホムンクルス）を創る

ことにしました。」

思考が変だとか思わないでくれ。

数千年も一人だけだと、気が狂いそうになるんだ。

「じゃ、ちゃっちゃっと済ますか。
えーと、材料も錬金術で錬成して魔力で代替に出来るものはして、
そうだ、俺の血を使うか。
で、義骸が出来たらそれに結晶を入れて、俺の血を使いながら馴染
ませて……完成！」

ふふふ、後は目覚めるのを待つだけだな。

「…ん、……あぁー。」

最初に起きたのは強欲か。

「おはようございます。親父殿。」

「おはよう。‘アヴァリティア’」

「それが俺の名かい？」

「そうだよ、‘アヴァリティア’」

「ふむ、気に入った。これからよろしくな。」

「あぁ、よろしく。」

「ん、」

「起きたか。」

それから、順番に皆起きていった。

名前は、
暴食が‘グーラ’
憤怒が‘イーラ’
怠惰が‘アーセディア’
傲慢が‘スペルビア’
嫉妬が‘インウィディア’
色欲が‘ルークスイア’
強欲が‘アヴァリティア’
だ。

彼らの紹介は後々、機会があるごとにしよう。

そして、新たに仲間が出来て一億数千万年。

俺は毎日、恐竜の保護や皆と修行しながら過ごしていた。

するとある日、地球に巨大隕石が落下してきたのだ。

あれは、ホントにビックリした。

震度８以上あるんじゃないかと思う程に揺れたし、ものすごい高さの津波も襲ってきた。

俺達はそれでも無事だったが、魔法球に入れた以外の恐竜は絶滅してしまった。

自然の摂理として仕方無いと思い見ていることしかしなかった。

隕石は何か使い道があるかと思い、一応採取しておいた。

恐竜が滅んだ所で、時間は変わらず進んで行く。

隕石が落下してから更に数千万年。

やっと、人類が誕生した。

まだ、猿人の段階だが、ここからは脅威的なスピードで進化していくだろう。

つまり、今は大体４５０万年前だな。

今の俺と同じ人類が出現するのは後、４４０万年。

今までの歳月に比べたらなんてことないな。

型の反復やあいつらとの組手や模擬戦で時間を潰すか。

それに魔法球の中の恐竜も地形によってかなり独自の進化を遂げちまったんだよな。

魔力が満ちている空間だったのが影響してるのかもしれないが、今度ちゃんと調査しなければ。

「と言うわけで、やって来ました。魔法球！草原エリア！」

「突然どうしたんですか？父上。」

「ああ、スペルビアか、気にするな言いたくなっただけだ。」

スペルビアは見た目普通の子供だな。
戦闘は影の魔法と闇の魔法を使う後衛タイプだな。
性格もまともだし傲慢の要素はあまりない。

「それで父上は何をしに来たんですか？
魔法球の管理は僕とイーラに任せてもらってるはずですけど。」

「あれ？　アーセディアは？」

ここの管理は三人に任せたはずだが？

「アーセディアなら洞窟エリアの最奥でずっと寝てます。
まぁ、いてもいなくても同じなので僕としてはどうでも良いんですがね。」

「そうか。それで大丈夫なら別に何も言わないけど。
俺が来たのは、この魔法球内で生物がどんな進化をしたかを見に来

たんだよ。」
「そうですか。
なら、そろそろ来ますね。」
「何がだ？」
「この草原エリアの王ですよ。」
スペルビアが言い終わった時、日差しが遮られた。
見上げると翼を大きく広げた姿。
太陽に反射して煌めく紅い鱗。
「リオレウス……」
「あれが、このエリアの支配者ですね。」
「ファイアドラゴンの方が迫力あるな。」
「えっ？」

「えっ！」

「なにそれ怖い。」

「他のエリアも見て回るか。」

「それでは僕はこれで、まだ生態系が安定していないエリアもあるので、基本見るだけにして下さいね。」

「そんぐらい分かってるよ。
イーラにもよろしくな。」

「はい、失礼します。」

影に沈みながら転移する。

「さて、次は久しぶりにレヴィに会いに行くかな。
なんだかんだであいつが一番付き合い長いし。」

そういや、あいつってインウィディアと相性最悪なんだよな。
嫉妬繋がりか？
属性も両方水と氷だし。

「フェニはイーラとやたら仲良いんだよな。
古塔で飲み会することもあるらしいし。
鳥と人間なのにな。」

さて、影転移を発動してと。

また、数百万年程この中で隠居しながら暮らすのもいいか。

レヴィも魔法を扱えるし、魔法戦闘に慣れとくのもありだしな。

この魔法書に書いてないことにも挑戦するか。

この世界には気と云うものもあるみたいだし。

アーセディアは完全に気だけみたいだし。

気と魔力でなんか出来ないかな？

まぁ、これから考えればいいか。

第二話（後書き）

ホムンクルス登場

容姿はハガレンと同じと思ってくれて良いです。

第三話（前書き）

やっと原作キャラ登場です。

第三話

どうも、カズキです。
今は中国は黄河に来ています。

いやぁ、やぁっと各地で文明が発達してきました。
そして、文明が発達してきたのを期に、俺もそろそろ名字を考えてみようと思う。

こっちでは、きっちりフルネーム名乗りたいしな。

うーん…カズキは愛着も出てきたしなぁ……
……よし！

‘七々己　一希　（ななみ　かずき），にしよう。
決定。

俺は今から七々己一希だ。

「名前の話はこれまでにしてと、黄河文明以外の文明の様子も見たいし。
武装錬金“サテライト３０”」

三十人に別れて世界中に散る。

今や“サテライト３０”は完全に思考を分断することが出来るし、思考や記憶を共有することも出来る。

ついでに言うと、魔法球の管理を頼んだ三人以外の人造人間も世界を転々としていたりする。

時々出会えば、しばらく行動にしてまた別れるの繰り返しだ。

皆出会う度に能力や魔法の扱いが強く、巧くなってるんだよな。

「まぁ、良いや。
これから人類がどうするかゆっくり見させてもらおうかな。」

俺は見物しながら魔力と気の合成の強化をしとこ。

具体的には、霊力や天使の力（テレズマ）を混ぜてみている。

二つだけを合成させるのは比較的簡単なんだが、それが三つになると途端に難しくなる。

「はぁ……儘ならないものだな。」

そんなこんなで練習するのに、千年単位を使ってると、突然。

「……異界が創られたのか？
それもかなり大規模なものが。」

こんなことが出来る人間が現れるとはな……面白い。
行ってみよう。

解空（デスコレール）を使い、空間に裂け目を生み出し、そこを通って異界に移動する。

「――――到着。
ここか……これは……位相が少しずれてるが…火星だな。
しっかし、よくこんなもの創ったな。俺でも一からは無理だわ。」

「貴様！　何者だ！？」

「ん？」

いきなり話し掛けられて何かと思えば、全身が黒いヒラヒラで覆われている変な奴がいた。

「何者だ！？…と言われてもだな……いたって普通の一般人だが？それに人に名前を聞くときは自分から名乗るべきではないか？」

「…確かに魔力は一般人のそれとは変わらないが……ここ（・・）に人間が存在していることがおかしいのだ！」

「そんなに変か？
なんとなくで来れたけど？」

「ふざけるな！！」ウォガッ

うわぁ、すっげぇ複雑な魔方陣を一瞬で構築しちまったよ。

「答えろ、貴様は何者だ。」

質問のはずなのに疑問符が付いてない。命令ってことですね。

「答えぬか……ならば仕方無いな」ドッ

魔方陣から物凄い魔力密度の光線が放たれる。

「はぁ…七々己　一希だ。
初めて名乗るんだから……覚えとけよ。黒ローブ！」

こっちも影の槍で迎え撃つ。

俺と奴との中間で激突し込められていた魔力が爆発する。

爆発で視界の悪いうちに瞬歩で近付き、影で作った剣で斬りかかる。

ガキン「っ！　堅っ！」

なんだよ、この馬鹿みたいな強度の魔力障壁。

剣がまるで届かなかったよ。

「（スッ）」

黒ローブの手の動きに合わせて構築されていく魔方陣。
属性もない只の魔力だが、量と密度が半端じゃない。
「おっと」
うーん……近付いても魔力障壁で防がれて、離れれば魔方陣からの集中放火……あの障壁さえ抜ければ、届くんだが。
「千の影槍」
イメージは集約
「影の大槍」
数枚は破れたか……けどまだ、足りないな。
影の使い魔を出して、多方向からの同時攻撃。
その直後に
「万の影槍――集約――影の巨槍」

一点集中攻撃

「ぬぅ……」

槍が腕を掠めた程度だが、確かに届いた。

なら、そこを基点に攻めていくか。

「まだだ！」

黒ローブが手を複雑に動かすと……弾幕の密度が増えました。

「戦いの旋律二倍速」

俺自身の速度を上げる。これは所謂、当たらなければどうと言うことはない。だな。

痛っ、くそ、普通に当たっちまった。

右腕が消し飛んだ。“ボキュ”とか云って消えたよ、“ボキュ”だぜ。

あ、でも。

「なんだ、その魔力は……」

魔力が一気に四倍になっちゃった。テヘッ。

うん、キモいな。自分でやってて吐き気がしたよ。

仕方ないんだよなぁ、いくら魔力制御が上達しても封印具を付けなきゃ、垂れ流しになってるんだし。

魔力が馬鹿みたいに多いとこれはこれで苦労するんだよ。

贅沢な悩みかもしれないけどな。

まぁ、良いや。

せっかくこの状態になったんだから、この状態でしか使えない、影の接近戦闘最強奥義でも使うかね。

「黒衣の葬送曲」

俺の背面に影で編まれた人形が現れる。
サイズは俺の1，5倍程で、俺と同じデザインの黒い羽織と着流しを着て、顔には十字の模様が入った白い仮面を付けている。

「さぁて、せっかく出したんだ。
少しは楽しませろよ。」

「なめるな！！」

――――――――15分後

「ま、こんなもんだな。」

「ぐ……ぉ……」

片腕はなくなっているが、普通に立っている俺と倒れている黒ローブ。

勝敗は言わずとも解るよな？

「結局のとこらさぁ、お前名前何て言うんだ？」

「……造物主（ライフメーカー）……と名乗っておこう。」

「ふーん、造物主ねぇ……一応覚えとくとするよ。
久しぶりにまともに戦えて楽しかった。
じゃあな、怪我も死ぬほどじゃないし、安静にするなり魔法で治すなりすりゃ大丈夫だろ。」

解空（デスコレール）を使い、地球に戻ろうとする。

「待て！　貴様は何者だったんだ！」

「名前を教えてやっただろ。
それだけだよ。」

次に造物主が何かを言う前に解空に入って移動する。

「あの者……七々己　一希と云ったか……一体何者なんだ？」

その疑問が解決するのは３０００年も後になるのだった。

――――――地球

「しかし、中々強かったなあいつ。
これから先、あのレベルの人間に何人出会えるかな？」

超速再生で腕を生やしながら笑う俺の姿は、端から見ればかなり怪しかっただろう。

第三話（後書き）

第四話（前書き）

今回は少し長め。

そして、久しぶりのあの人も登場。

第四話

数百年かけてようやく魔力、気、霊力、天使の力（テレズマ）、を全て合成することが可能になった。

可能になったのだが……

「きょ、強力過ぎる。」

前方は地面が抉り取られ悲惨な状況になっている。

「只の正拳突きでこの威力か……絶対人には使えないな。
はぁ、これも封印か。」

やっていいのは魔力と気の合成までだな。

霊力と天使の力は質が違いすぎて難しいが、その分威力がヤバい。

「ふぅー……」

一段落して、大きく息を吐き出す。

最近、記憶の共有をしたときにキリストが産まれたことが分かったから、今は大体西暦０年だな。

「はぁ…早くパソコン使いてぇ……いくらハイスペックでもこの携帯じゃ限界があるよ…」

余りにも永い年月を生きると、どうしても娯楽に飢えてしまう。

携帯のアプリの将棋、囲碁、チェス、麻雀、等々。

ボードゲームはＣＰのレベルを最高にしても簡単に勝ててしまうので飽きてくる。

もちろん、アンサートーカーなんて使っていない。

素の能力で勝ててしまうのだ。

「何か暇潰しを考えないとな……」

とりあえず、地球一周でもしてみるかな。

今は日本だから、北に真っ直ぐ行ってユーラシア大陸。その後は北

極。北アメリカ大陸だな。

「行ってみるか。」

ゆっくり世界を見て回るかな。

……

あれ？　あの船は日本のじゃねぇか？

あの船も中国……いや、この時代なら漢か……に向かうんだろうな。

俺は霊子を足場にしてその上を歩いてるからな、あっちから見えることはないだろう。

ついでだし、ついていってみるか、無事にたどり着けるか、見てみたいし。

うん、普通に着いたね。そこまで大きな嵐にも時化にも遇わなかったし。

はぁ……つまんね。

しゃあね、ここから北極にでも行こ。

人類最初に北極点に到達してやろ。

……

北極にいる生物も魔法球に入れたし、北極点に到達もしたし、このまま南？に行くか。

北アメリカ大陸辺りに行けるだろう。

……

北アメリカ大陸では、マヤ文明が大分発達していた。

その中でも、優秀な人達を引き抜いて魔法や錬金術を教え魔法球で生活してもらうことにした。

これで魔法球内はかなり発展するだろう。

そのまま、地続きの南アメリカ大陸に渡った。

アマゾン川流域のジャングルをさ迷ったり、アンデス山脈にあるインカ帝国に訪れたりした。

インカ帝国では医学が進んでいたので、また何人か引き抜いた。

俺自身は医学は必要ないのだが、魔法球内の人口も増えて来たので、医学の発達は不可欠だと思ったからだ。

あ、それからイースター島にも行ったな。

まだ、モアイ造りの最盛期だったみたいで島民総出で造ってたな。

俺も翼を出した姿でモデルにされたし。

イースター島の民族とも仲良くなり、しばらく経ったが周りの人間が段々年をとっていったので、俺はこの島を去ることにした。

不老と云うのは辛いな。

仲良くなった人間もすぐに年老いてしんでしまう。

次に向かったのはオーストラリア。

コアラでも抱っこしに行こ。

……

コアラ可愛いよ、コアラ。
はぁ……癒されるわぁ。

やたらでかいコアラとかもいたけど。

と、コアラはこれまでにして、アボリジニの人達ともあったし、エアーズ・ロックにも行ってみた。

中々のサイズがあったな。
見応えがあったわ。

オーストラリアで見るものはこれぐらいかな？

珊瑚礁なんざ、昔から見飽きてるし。

次はアフリカにでも行くかな。

……

やって来ました南アフリカ。

そして、見渡す限りの砂漠！

「さてさて、人はどこに―っ！！」

なんだこの魔力は造物主と同じかそれ以上だぞ、そんなものが突然現れたのか。

「あっちか……」

なんなのか、気になるし行ってみるか。

――――――転生者ＳＩＤＥ

俺は転生者だ。

突然死んだかと思えば神にチート能力をもらいネギまの世界に転生した。

もらった能力はナギの１００倍の魔力にラカンの１００倍の気。
さらに無限の剣製。
不老化だ。

今は原作開始の１０００年前だが、これから好き勝手に生きて原作キャラを奴隷にしてハーレムを作ってやるぜ。

先ずは能力を試してみるか。

ん？　向こうから何か飛んでくる？　丁度良い。能力の実験台にし

てやるぜ！

――――――一希ＳＩＤＥ

膨大な魔力を放っていたのは一人の男だった。

赤い外套を身に纏った、浅黒い肌の白髪の男。

身長は俺と同じぐらいだな。

「なんだぁ？　てめえも転生者か？」

醜く口を歪めながら話すが、顔の筋肉がその動きに慣れてないのか、筋肉が引き攣っている。

「……転生者なんて者では無いな。」

「はぁ？　そんな成りしておいて普通の一般人です。とか言うつもりかぁ？
この時代にてめえみたいな格好の奴が居るわけ無いだろ。」

「それは偏見だな、世界中を回ってみろ。
世界の何処かにはこの服装の集落があるかも知れないぞ？」

「けっ、もういいよ。
てめえには俺様の能力の実験台になってもらうぜ！
同調（トレース）・開始（オン）」

男の手に握られるのは、黒と白の双剣

「仕方ないな。」

俺も剣を抜くが構えはしない。なんとなくだが、構える気にならない。

「何をしているだ！」

「？」

「さっさと降りてこい！」

「飛べよ……」

「飛べるわけ無いだろうが！」

いやいや、そんな魔力も気もあるんだから舞空術位使えるだろうが。

それに強気で言えることでも無いだろ。

「はあぁー……」

ぎゃーぎゃー騒いでいるのが可哀想になり、地面に降りてやる。

「そうだ、それで良いんだよ。」

いちいちイラッとさせてくれるなこいつ。

年上に対しての礼儀を教えてやるか。

「『ちょ～～～～っと待った！！』」

「……」

「今度はなんだよ…」

いつも、突然、いきなり、前触れも、予兆もなく現れて場を乱す存在。

ギゼンが来た。

「『どうも～』
『いつも』
『突然』
『いきなり』
『前触れも』
『予兆も』
『なく現れて場を乱す存在のギゼンで～す』」

「僕もいますよ～」

「『そうだった！』
『アンラちゃんも居ま～す！』」

「今回は何しに来たんだ？」

一応、今からあの無礼な奴に礼儀を教えてやろうとしたんだがな。

「『久し振りなんだからそんな邪険しないでよ』
『何年振りかなぁ』
『君に会うのも』
『大体一億年と九千飛んで十五年と六十七日三時間二十八分四秒振りだね』
『その間に君なんて自分でフルネームなんて決めちゃうしさぁ』
『だから』
『僕も自分の名前決めちゃった』
『君には負けたく無いしさぁ』
『あ』
『それは今更かな？』
『それでもアンラちゃんと相談して決めたんだよ』
『君みたいに一人で自己満足で決めたりなんかしてないよ』
『ははは』
『嫌だなぁ』
『嫌味で言ってるんじゃないよ』
『一人で決めるしか無い状況だったなんて思って無いからね』
『一人で寂しい奴だなぁなんてこれっぽっちも思って無いから安心してね』」

「分かった。もう良いから。落ち着け。」

「『落ち着け？』

『僕は落ち着いてるよ』
『何時何時も冷静じゃないか』
『ねぇアンラちゃん』
『僕は何時も冷静沈着だよね？』」

「そうですよね。何を言ってるんですかカズキさん。」

俺か？俺が悪いのか？

「さっきから俺様を無視して何をごちゃごちゃやってるんだよ！！」

「『……何あれ？』
『アーチャーのつもり？』」

「ギゼンさん。アーチャーって何ですか？」

そうだ、何処かで見たと思ってたらあの運命のゲームに出てきた五次のアーチャーだ。

「『アンラちゃん』
『あのアーチャーはただのフェイカーだから気にしなくて良いよ』
『正真正銘の贋者だよ』」

「なんだとてめえ！！
贋者かどうか分からせてやろうか！！」
双剣で斬りかかるフェイカー。

「『そうだ』
『僕の名前はさぁ』
『八咲（やつざき）　偽善（ぎぜん）』
『にしたから』
『よろしくね』
『アンラちゃんも』
『八咲　安楽（あんら）』
『に改名したから』」

「俺は知ってるかもしれんが一応言とっくけど、七々己　一希だから。
まぁ、よろしく。
それと、そろそろ後ろ危ないぞ。」

「もう、遅せぇよ！！」

「『虚刀流“牡丹”』」

「が……！？」

強烈な後ろ回し蹴りが決まった。

「『障壁は張ってるみたいだね』
『一撃は無理だったよ』」

「く、――――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ，（我が骨子は捻れ狂う）」

「何か、凄く魔力を籠めてますよ。」

「大丈夫だよ。心配するだけ無駄だ。」

「偽・螺旋剣？（カラドボルグ）」

中々の爆発が起きたな。
まぁ、原典（オリジナル）は全部偽善が持ってるからな。所詮は紛い物だ。

「死んだか……？」

「『やられたよ……』

『まさかここまでやるとはね』
『僕の想像以上だ』」

煙が晴れた先にいた偽善は、全身ボロボロで立っているのがやっとの状態だった……なんてこともなく、無傷でピンピンしていた。

「そっちよりもこっちのが被害がでかい。」

演出かしらんが、風で砂埃をこっちに吹き飛ばしやがって。

「『冗句はこれまでにして』
『分かったかい？』
『これが君の実力だよ』
『残念ながら』
『君じゃ僕らには勝てやしないよ』」

「まだだ！！」

往生際が悪いなぁ、正直飽きてきた。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ――――体は剣で出来ている

Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，　ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ，――――血潮は鉄で心は硝子

Ｉ　ｈａｖｅ「『虚刀流“薔薇”』」ちぇるの〝ぶっ！」

「そらそうなるわな。」

敵の目の前で悠長に詠唱するなんて、攻撃してください。と言うようなもんだ。

「『馬鹿だね君』
『隙だらけだよ』
『そんな詠唱待つわけないだろ』」

「そこは空気読めよ！！」

「『は～』
『やれやれ仕方無いねぇ』
『さっさと詠唱しなよ』」

「よし！

Ｉ　ａｍ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ――――体は剣で出来ている

（そこからやるのかよ。）

Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，　ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ
ｍｙ　ｂｌｏｏｄ――――血潮は鉄で心は硝子

Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａ　ｔｈｏｕｓａｎｄ
ｂｌａｄｅｓ――――幾たびの戦場を越えて不敗

Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｄｅａｔｈ――――ただの一度も敗走はなく

Ｎｏｒｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｌｉｆｅ――――ただの一度も理解されない

Ｈａｖｅ　ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ
ｍａｎｙ　ｗｅａｐｏｎｓ――――彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う

Ｙｅｔ，ｔｈｏｓｅｈａｎｄｓ ｗｉｌｌ ｎｅｖｅｒ ｈｏｌｄ ａｎｙｔｈｉｎｇ――――故に生涯に意味はなく

Ｓｏ ａｓ Ｉ ｐｒａｙ“ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ ｂｌａｄｅｗｏｒｋｓ”――――その体はきっと剣で出来ていた」

詠唱が終わると炎が広がり世界を侵食し書き換えていく。

地面は荒野となり無数の剣が突き刺さり、空には巨大な歯車が回っている。

「ひゃははは！！　これでお前らも終わりだ。」

「『なんで？』」

「あぁ？　解らねぇのか？今からお前を襲うのは無限の剣。剣戟の極地だぞ。
お前に勝目なんてあるわけないだろ！」

「『そうなんだ』
『それは困った』
『うーん……どうしようか？』」

「今、土下座して、ごめんなさい。許して下さい。と言えば命は助けてやるぜ。」

「『ごめんなさい』
『許して下さい』」ＯＴＺ

したよ、即行で。

「ぷっ、ははははは！！　そうだ！　分かれば良いんだよ！」

偽善の土下座をあっさり信じて、固有結界を解いた。

「それじゃあ、お前には俺様の奴隷にでもなってもらおうかな？」

「『それは嫌』」

「は？」

「『虚刀流最終奥義』」

「え？」

転生して、簡単に力を得て、有頂天になって、気を抜きすぎだな。

「『七花八裂・改』」

虚刀流の七つの奥義を“柳緑花紅”→“鏡花水月”→“飛花落葉”→“落花狼藉”→“百花繚乱”→“錦上添花”→“花鳥風月”の順番で同時に繰り出す。

「きゃー！　かっこいい！」

「『ありがとう』
『アンラちゃん』『」

「おーい、生きてるかー？」

「……ピクピク」

「……返事がない、ただの屍のようだ。」

しゃあない、天界にでも送っとくか。

「……ふん！……これでよし！」

ちゃんと、天界までとどくだろ。

「今、投げましたよね？」

「で、偽善。お前は何しに来たんだ？」

「無視ですか」

「『軽く報告をね』
『僕ら「完全なる世界（コズモエンテレケイア）」に入ったんだ』
『それと』
『軽く原作のヒントをあげようと思ってね』
『今から４００年後』
『ヨーロッパで戦争が起こる』
『そこに面白い存在がいるから行ってみたら？』
『後』
『今から９７０年後には絶対に魔法世界に居てね』」

「さっきから、気になってるんだが、“原作”ってなんだ？」

「『んー』
『それは教えない』
『その方が面白そうだし』」

「まぁ、良いや。
最初に神さんが物語とか言ってたし、それ関係だろ。
俺にはこの世界が現実だしな。」

「『それも真実かもね』
『じゃ』
『そろそろ行こうかアンラちゃん』」

「久しぶりなのにもう良いんですか？」

「『一応』
『僕らも組織に所属してるしね』
『時間は大切にしなくちゃ』」

「そうか、ま、頑張れや。」

「『うん』
『頑張る』
『じゃあね～』」

「失礼します。」

俺も手を振って返す。

「『あ！』
『最後に一つ』
『暇だったらでいいから日本のここにあるものを気に掛けてくれない？』
『土地の名義は僕の物になってるけどこれを見せたら大丈夫だから』
」

「暇だったらな。」

「『じゃ』
『バイバ～イ』」

嵐が去ったな。

「そんじゃ、ヨーロッパでも目指してのんびりと行ってみるか。
４００年もあるみたいだし。」

それよりも問題は転生者だな。

上級神レベルから能力をもらったのなら、俺にも対処出来るだろうが、能力によっては面倒になるだろうな。

周りにも影響が出るだろうし。

「はぁ、厄介だな。」

神にも連絡しておこ、厄介事を増やさせないようにしないとな。

第四話（後書き）

これでストックが切れました。

次話まで少し時間がかかります。ご了承下さい

第五話（前書き）

原作レギュラー登場です。
さて、誰が登場するでしょうか。

第五話

偽善との再会から、４００年。

あいつの言っていた面白い存在とやらが気になりヨーロッパに来ている。

「しっかし、寒いな。」

アフリカの砂漠の次に真冬の欧州は気温差が酷い。

「それに……ここもか……。」

どうやら、最近ヨーロッパで戦争が起きているようで、荒れて亡ぼされいる町をよく見る。

「人間はホントしょうがないな。こんなことを何度も繰り返して。」

「う……ぁ……」

「声？　……生き残りが居るのか？」

瓦礫をどけて、声の本を探す。

「居た。おい、大丈夫か？」

瓦礫のしたに居たのは、傷だらけの少年。
金髪の…まだ5、6才の少年だった。

「だ……れ……？
…な……に……？」

「喋るのは無理か、安心しろ、すぐ治療してやる。」

「あ…りが…とう……」

気絶したか、　気が抜けたんだろ。

「“治癒”」

ホワ…と光が出て少年の傷を癒していく。

「……ふぅ、これでひとまずは大丈夫だな。」

外に寝かしておく訳にはいかないので、比較的まともな家のベッドに寝かせる。

まだ生き残りが居るかもしれないから、探査で村全体をさらってみる。

しかし、反応はなくこの村にはこの子しか居ないようだ。

「避難している可能性もあるが、この少年が唯一の生き残りだな。」

気になる所も幾つかあるけどな。

それは今はいいだろ。

少年が目を覚ました時のために、なんか作っといてやるか。

お粥で平気かな？

ヨーロッパの病人食がなにかなんて俺も作者も知らないし……。

「んぅ……あれ、ここは……」

「起きたか。」

「ひぃ、誰ですか貴女は？」

めっさ怯えられているのはなんでだ？
それにニュアンスがおかしかったような？

「落ち着け。……かくかくしかじか……という事があったんだ。」

「あ、それは助けて頂いてありがとうございました。」

「それで、腹減ってるか？
お粥作ったんだが。」

「え、そんなそこまでしても（ぐぅぅーー）ら……」

「持ってくるよ。」

「すいません……」

お粥を小鉢に入れてスプーンと一緒に渡してやる。

「熱いからゆっくり食えよ。」

「これはオートミールですか？」

「お粥」

「おかゆ……ですか…えっとそれじゃあ食べさせてもらいます。」

最初はおそるおそる、二口目からは普通に食べてくれた。

「ありがとうございました。おいしかったです。」

「ん、お粗末様でした。
それで聞きたい事が幾つかあるんだが……いいか？」

「……はい。大丈夫です。」

「とりあえず、名前は？
俺は七々己　一希……こっち流じゃ、カズキ・ナナナナミか。」

「はい、ぼくは、ライナです。
……ファミリーネームはありません…。」

「ライナ……ね、ファミリーネームが無い理由は聞かない事にするよ。」

助けた時にライナだけで近くに死体が一体も無かったからな。

昔に両親が死んだか、捨てられたか……

「じゃあ次の質問だ。
この村が壊滅しているのはなんでだ？
それに生き残りは他にいると思うか？」

「この村がこんなになったのは盗賊に襲われたからです。
盗賊はまほ……不思議な力を使って村を壊して金目のものを奪っていきました。
あいつらは徹底的に殺そうとしていましたから、多分生き残りはいないと思います。」

言い直したが、不思議な力は魔法だろうな。

魔法使いがこんな小さな村を襲ったのか。

「ライナは……魔法について知っているのか？」

「――っ！！」

知っているようだが、様子がおかしいな。

「俺も魔法については知っているし、色々なモノも見てきている。何を言っても多分大丈夫だぞ。」

ライナは俯いたまま動かない。いや、肩が小刻みに揺れている。

迷っているようだな。

「……僕は……魔眼持ち……なんです。

“複写眼（アルファ・スティグマ）”……という魔眼を持ってるんです。

開眼したのは三年前、……僕が三歳の時です。

その時に、頭の中にこの眼の事や……魔法について……他にも様々な情報が流れ込んで来たんです。

最初は特別な力だと嬉しかった……でも……この力は異常だった

んです。
この眼を見た両親は…僕を気味悪がるようになって……捨てられました……。
信じられないことかもしれませんが……僕が魔法について知っているのはこういう訳です。」

絞り出すように訥々と語るライナ。

三年間、一人で過ごしてきたんだな。

孤独の辛さを知っている身としては、その痛さが分かりすぎる位分かるな。

「そうか。分かった。
それじゃ最後の質問だ。

ライナ。　お前はこれからどうしたい？」

「……どうとは？」

「俺と一緒に来るのもよし。
近くの村で普通に暮らすもよし。
その眼を知っても気にしない奴らの所で暮らすもよし。だ。

決めるのはライナ。自分自身だ。」

こういう選択は自分で決めないと意味がない。

人に決められた道を進むのは楽だが、進歩には繋がらないからな。

「僕は……」

……

「そろそろ行くぞ。」

「はい」

結局ライナが選んだのは俺と一緒に来ること。

旅をしながら俺がライナに魔法や戦い方を教えることになった。

魔法に関しては複写眼があるから教えることは少ないし、戦い方を特に近接戦闘について重点的に教えよう。

「楽しくなりそうだな。」

「お、お手柔らかにお願いします……。」

どうしたんだ？　冷や汗なんか流して、俺は優しい先生だぞ。　ククク……

「……早まったかも……」

……

うん、複写眼（アルファ・スティグマ）ってヤバイね。

一回魔法を見ただけで、その構成を理解して自分のものにするなんて。

ま、その反動でやたら眠くなるようだけどな。

試しにガッシュに出てくる術を見せてみたら、普通に理解してたからな、中級は一つ見ただけでぶっ倒れて眠っちまったけどな。

ここら辺はゆっくりとやっていくしかないな。

幸い、ライナにもまだまだ時間はあるんだし。

そんな感じで、ヨーロッパ各地を回っていたら、至る所で魔女狩りが行われていた。

大概は普通の人、あるいは魔法使いだったので、火炙りになる前に助け出して逃がすか、魔法球に入ってもらった。当然、ライナに魔法を見せてからだが。

もう、魔法球内は人種のサラダボウル状態だ。

「何時の時代も人間がいる限り世界平和なんてあり得ないのかな。」

木の十字架に藁束、眼下で火炙りの準備が着々と進められている。

「いやぁー！！　離してぇ！！」

「うるさい！　魔女が！」

「先生……」

「あぁ……」

大概は普通なんだが……

「見たか？」

「はい、あの子は人間じゃありませんね。」

ライナの眼には朱の五方星が浮かび上がっている。

複写眼で見ただろう。

「はぁ、無害そうだし、一応助けるか。
それと、多分だがライナのが年下だぞ？」

「……そうですか？　見た目１０才ぐらいですけど？」

「お前はまだ、８才だろうが。」

「……“眠りの霧”」

この魔法って属性が水だから俺は使えないんだよな。

「全員眠りました。」

「よし、助けるか。」

手枷を外して、眠ってる幼……少女を抱える。

「これって知らない人が見たら犯罪者じゃね？」

「人を殺したことがある時点で犯罪者ですよ。」

「あれは正当な過剰防衛だよ。」

「子供に見せる殺し方じゃありませんでしたよ。」

ジト目で見てくるライナ。

「起きる奴も出てきそうだから行くか。
向こうの森まで行けば大丈夫だろ。」

ライナを置いて瞬歩で移動する。

「ちょっと待って下さいよ先生。
僕まだ瞬動しか使えませんよ。」

……

森の中に一軒のログハウスを建て終わった頃にやっとライナが追い付いてきた。

「ぜぇ……ぜぇ……」

「遅いぞ。」

「なんで……わざわざ……こんな奥で……魔力まで完全に抑えて……途中にフェイクまで置いて……」

「いや、ただこの家を建てる時間稼ぎをしたかっただけ」

「十分程しか稼げてないですよね！？」

「建てるのは三分で終わったぞ。」

フェイクを作るのに時間掛かっちまった。

ライナは少し複写眼に頼り過ぎてるからな。

それを直してやりたい気持ちと純粋な悪戯心が混ざった結果だ。

「とにかく中に入るぞ。
お前も限界が近いだろ？」

「なら先に寝かせてもらいます。」

「二階の奥の右な。」

「定位置ですね。」

なんでか、ライナの定位置になった二階の右奥。

由来はなんだったか？　うん、忘れた。どうでもいいな。

「この子も寝かしとくか。
一階にベッドでも作ればいいな。」

にしても“眠りの霧”の効果ってこんなに長かったか？

――――少女ｓｉｄｅ

「ここどこ？」

たしかわたしは火炙りになりそうなときに突然眠くなって、でも今はベッドの上にいて……

「もしかして……ここって天国？　わたし死んだの？

……えぇ～～～！！」

「どうした？」

扉から入って来たのは不思議な髪の色をした綺麗な女の人。そして何よりもその背中には真っ白な羽が生えていた。

あ、わたしやっぱり死んだんだ。

この人は天使かな。

「おーい、大丈夫かぁ？　帰ってこーい。」

――――――――一希ｓｉｄｅ

「おーい、大丈夫かぁ？　帰ってこーい。」

助けた少女が目を覚ましたのは、あれから三日後のことだった。

突然叫び声が聞こえたからライナとの修行を中断して駆け付けた。

ライナには自主トレを命じておいたが。

「は！　わたしは死んだんですか！？」

「いや、生きてるけど。」

「生きてるんですか！」

「一先ずもちつけ…違った、落ち着け。　はい、深呼吸。」

「スー…ハー…スー…ハー
ふぅ…落ち着きました。
えっとわたしを助けてくれたんですよね？」

「あぁ、その通りだ。お嬢さん。」

「む、わたしにはエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという名前があります。お嬢さんはやめてください。」

「おっと、それは失礼。
俺は七々己　一希、こっち流じゃカズキ・ナナナナミだな。
カズキでもナナナナミでもナッチーでもお兄ちゃんでも好きに呼んでくれ。」

「じゃあ、お兄…ちゃん？」

「ぐはぁ！！」

「吐血ー！」

「と、悪ふざけはここまでにして。」

吐血？　そんなものはしてないよ。

「聞きたいことはあるか？」

「えっと……なんで助けてくれたんですか？」

「誰かを助けるのに理由が要るのか？
要るんだったら適当に考えるが。」

「わたしは……人間じゃないんですよ……」

「それが？」

「え？」

「はぁ……俺が人間に見えるか？
羽が生えてるこの俺が。」

「えっ……それは……」

悩んでるようだな。俺のことを認めてしまえば自分は人間じゃないと認めるようなもんだからな。

「ふむ……おーい、ライナー！　ちょっとこーい！」

「え、えっ、え？」

「なんですか先生？」

「こいつはライナ。
ちょっと、お前に聞きたいことがあってな。」

「？」

「俺はなんだ？　お前が思うことを素直に言ってみろ。

怒ったりしないから。」

「えっと、それは……鬼？　悪魔？　いやむしろ魔王？」

「よく解った。

ライナ。」

「はい。」

「明日の特訓５倍な。」

「え゛ー！？」

ピキッ、という音が聞こえたように石化した。

「まぁ、俺は人間じゃないわな。
ならなんだ？　と問われても答えることは出来ないけど、とかく人間ではない。」

「……」

「けど、別に人間とそこまで……結構違うけど……まぁ、うん、なんだ。あれだ。
俺らと来るか？」

「いきなりですね。」

「いや、めんどくさくなって来たんだよ。
あ、ライナは魔眼持ちだけど人間だぞ。多分……」

「わたしは吸血鬼ですよ。」

「わりとそこはどうでも良いんだよ。」

思い返してみるけど。

「俺って人外の知り合いが多いんだよ。
だから、人間だろうが無かろうがあまり関係無いんだ。」

「変わってますね。」

「よく言われる。」

「ついていって良いんですか？」

「いいよ。」

「軽いですね。」

「重くすることでも無いからな。
おし、ライナ！　起きろ。歓迎パーティーでも開くぞ。
準備を早く済ませたら特訓を普通に戻してやるぞ。」

「了解したであります。サー！」

「エヴァンジェリンもこい。
こっちの事情も説明してやるぞ。」

「あの～……展開が突然過ぎて追い付けないんですけど……」

「「慣れろ」」

吸血鬼の膂力って凄いね。
ある程度訓練しているライナを簡単に吹き飛ばしたよ。

俺には効かなかったけど。

追伸――――

歓迎パーティーを始める頃にはエヴァ（こう呼んでいいと言われた）も諦めたのかテンションを上げて楽しんでいた。

俺もテンションが上がって酒まで出してしまった。

エヴァが一番酒が強かったのには納得がいかないが。

ライナは一杯でぶっ倒れた。

第五話（後書き）

ライナは伝勇伝のライトとフェリスを足して割った感じを想像してもらえれば合うと思います。

第六話（前書き）

時系列が分からない。

魔帆良学園って近衛　近衛右門が造ったのか？

関東魔法協会って魔帆良と同時期？

そこら辺は独自解釈でやっていきます。

ご容赦下さい。

第六話

ライナと出会い。

エヴァと出会い。

あれから、数百年が過ぎた。変わったことと言えば。

ライナが不老になった。

これは単純、ライナが１５才の時に突然不老になった。
既に二人も不老者がいるから大した問題にならなかった。

エヴァがチャチャゼロという殺戮人形を造ったり、オリジナル魔法を創ったこと。

これは、エヴァが守られるだけは嫌だと努力した結果だ。

俺達全員が賞金首になった。

額は
俺・１７００万$
エヴァ・６００万$
ライナ・１００万$

エヴァを狩ろうとする馬鹿どもや、やたら正義のため正義のためと言う魔法使いを殺していたらこうなった。

最後は、俺達に変な通り名が着いた。

俺は「天使の羽持つ魔王」「影統べる女王」「破壊の皇帝」「無差別魔法使ってるけど隣の奴が一番被害出てる」等々

エヴァは「魔王の娘」「人形使い」「闇の福音」「不死の魔法使い」等々

ライナは「魔王の従者」「哀愁漂う愚者」「睡眠を求める者」「えっと、ドンマイ」等々

さすがに賞金稼ぎや正義馬鹿がうざくなってきたので、偽善が言っていた、日本に行くことにした。

二人が居ることだし、久々にフェニを喚んで認識阻害全開で飛んで行くことにした。

「火の鳥に乗ってるのに熱くないというのも不思議な感覚だな。」

「……ＺＺＺｚｚｚ」

「エヴァ、口調が荒れてきてるぞ。」

「いいではないか、これも父様やライナの影響だ。」

「あぁ……あんな可愛かったエヴァが何故こんなことに……今でも十分可愛いけどな。」

「な！　いきなり何を！」

「ソンナ会話ハヤメテクレ、聞イテルコッチガ気恥ズカシクナル」

「チャチャゼロか、会話に入るのは珍しいな。」

「マァナ、ソレヨリ旦那斬ラセテクレヨー」

「解った。やっぱり黙ってろ。」

話す度に斬りかかられたら面倒くさい。

「……嫌なわけではないんだが……心の準備が……ブツブツ」

「おーい、エヴァー、帰ってこーい、お前それ多いぞー。」

「は！　私は一体何を！？」

「そこはもう良いんだ、気にするな。」

「む、そうなのか？」

「あぁ、そうだ。」

そこからもとりとめのない話をしながら飛ぶこと数時間。

日本にようやく到着した。

場所は関東方面と目印の巨樹しかわかってないが、一目で分かるほどあり得ないサイズの巨樹らしい。

「……あれだろうな。」

目の前にあるのは２００ｍを優に越える巨樹。

それにただ大きいだけじゃない。

「父様……この樹の魔力……」

「あぁ、中々の内包量だな。
ライナ、起きろ。
ちょっと、この樹を視てみろ。」

「えぇ～」

寝惚け眼だが、その眼には朱の五方星が浮かび上がっている。

「うーんー、確かに凄い量だね～エヴァや、ましてや僕なんてまるで及ばない量だね。
でも、先生の全力とならいい勝負しそうですね～」

俺の全力といい勝負か……今の状態でエヴァより少し少ない位だから、かなりの量だな。

右手のリストバンドで三倍、左手で四倍、限定解除を二重掛けしてるから五倍の二乗。計三百倍になるからな。

「よし、気に入った。
ここに家を建てよう。」

「相変わらずいきなりだな。」

「用事済んだんならまた寝ますね～」

「今回は武家屋敷風にするぞ。土地の許可もこの書類があれば大丈夫だろ。
８００年前の書類だけど……」

何でこの書類は一切劣化してないんだ？

「俺は家を建てるから、エヴァは結界を頼む。ライナも微調整を手伝ってやれ。」

複写眼なら構成を一瞬で理解出来るからな、無駄を探すのは楽なんだ。

こんな樹が人間に見つかれば利用されるだけだろうからな。
守るは言い過ぎでも、変に知られない方が良いだろ。

「父様、認識阻害と侵入感知位でいいか？」

「後弱めでいいから人払いも居るかな、魔力の供給は俺がやるから俺とリンクするようにしといてくれよ。」

「分かった。ほら、ライナさっさと働け。」

「うー、あー、だりぃー。」

「……あっちは大丈夫そうだな。こっちもちゃっちゃと終わらすか。」

……

「出来たな。」
「疲れた。」
「お休み。」

結界の術式は簡単だが、何せサイズがサイズだ。
術式を刻むのが大変だっただろ。

「さあ、新居に入ろうか、引っ越し祝いに和食でも食うぞ。ライナも寝るなら中で寝ろ。」

「わしょく？　それはどんな食べ物なんだ？」

「うーん……引っ越しだから蕎麦は外せないかな……後は白米とか味噌汁とか……天ぷらや寿司も和食なのかな…寿司は流石に無理だな。いや、刺身ならあるいは……それと天ぷら蕎麦……天丼もありかな……煮物は時間もかかるし……食材と相談かな……
ま、見て食べてのお楽しみだな。」

「そうか……ふむ、楽しみに待っておく。」

「おう、期待して待ってろよ。」

結果、夕食は中々豪勢で楽しく食べました。

夕食後、少し今の日本について話し合った。

「どうやら、日本では陰陽術が発達しているようで魔法は殆ど使われていないようだ。
つまり、俺達の情報はこの国には届いてないと思う。」

俺達を追い回していたのは、“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”がメインで、たまにバンパイアハンターみたいな賞金稼ぎが来るぐらいだったしな。

「しばらくは静かに暮らせるということだな。」

「エー、ツマンネェナァ、斬ラセテクレヨォ」

「エヴァ、チャチャゼロへの魔力供給を止めておけ、話しに入られるとややこしくなる。」

「すまないが父様。
魔力供給を絶っても動けないだけで喋る位は出来るんだ。」

「ケケケ、残念ダッタナ旦那」

仕方ない、消音の術式を刻んだ袋にでも入れておくか。

「チョ、ナニスンダ旦那、ご主人助ケテクレヨォー――――――――――」

「静かになったな。
えっと、どこまで話をしていたんだっけか。」

「ここまで情報が来てないから静かに暮らせるというとこまでだな。」

「おぉ、そうだった、そうだった。
続きを話すぞ、静かに暮らす事は出来るだろうけど、この国では俺らの容姿は目立ち過ぎるんだ。」

「……それだけか？」

何言ってんだこいつ？　みたいな目で見られた。

「それだけって、結構重要なものだと思うぞ。」

「国が違うんだし、見た目の違い位あるだろう、それに今さら見た目程度がどうした。

その位、魔法で変えれば良いだろう。」

「それはそうなんだが……それで良いのか？」

「幻術で黒目黒髪に変えれば良いだろ。
人前に出るときはそれで十分だ。
もし、万が一が起きても軽く記憶操作すれば問題はないだろ。」

「むぅ……はぁ……人前に出るときは幻術の徹底。
これは絶対にしないとな。
後は臨機応変になんとかしていくか。
……ちょっと待てよ。
エヴァ、日本語は分かるのか？」

「……翻訳の魔法でなんとか……」

「そんな魔法教えたか？　それとも創ったのか？」

「ぐぅ……これから創る。」

「はぁ……先ずはそれからだな。
俺も協力するからすぐに完成させるぞ。
最悪、会話だけ出来れば良いんだし、日本は識字率は高くないから

それでも大丈夫だろ。」

「はーい」

「ライナは……後で一回見せたらいいか。」

答えを出す者（アンサートーカー）を使い、エヴァに説明、改良を行い、二時間で翻訳魔法を完成させた。

第六話（後書き）

チャチャゼロが書きづらい。それにエヴァのキャラが安定してない。

二次小説は難しいと今更ながら痛感している作者です。

第七話（前書き）

今回は修行パートと次話への繋ぎです。

第七話

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック氷の精霊２９９頭。集い来たりて敵を切り裂け。『魔法の射手・速弾・氷の２９９矢』」

「影布三重対魔障壁」

障壁一枚の破壊に大体魔法の射手１００矢。

障壁は全て破壊されたが、矢は一矢も届かなかった。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック来たれ氷精、闇の精、闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』」

「影布八重対魔障壁」

強力な吹雪と暗闇が発生し、障壁を破壊しながら襲い掛かってくるが、全ては破壊しきれずに吹雪は消えてしまう。

「くっ、これもか……なら、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

いきなりどうも、今はエヴァと模擬戦をしている。

ただし、ハンデとして、
こちらからの攻撃なし。
こちらは移動してはならない。
がある。

まぁ、制限時間が設定してあるので、それまでにこちらにダメージを与えたらエヴァの勝ち。
ノーダメージなら俺の勝ちだ。

「……解放・固定『千年氷華』」

エヴァの詠唱が終わったようだな。

詠唱っていいよな、影魔法には詠唱がないんだよ

いっそ、俺がオリジナルで創ろうかな？

「掌握！術式兵装『氷の女王』」

魔法そのものを取り込むエヴァオリジナル技法。
闇の魔法。

取り込む魔法によってその能力、効果は変わる。

この魔法の効果は俺も知らないからな。

様子見も兼ねて。

「影布百重対魔対物障壁最高硬度」

「え゛!?」

制限時間一杯かけてようやく十枚だけ破壊出来たとさ。

「うぅ……あれはひどすぎる。」

「落ち込むなって、効果が解らない時は何よりも警戒しろって教えただろ。
それを実践してるんだよ。」

「それでもあれは無いぞ、父様の障壁は堅すぎるんだ。」

「はいはい。　まだまだエヴァに負ける気は無いからな。」

まぁ、真祖の魔力や筋力等のスペック頼みの戦闘じゃなくなってきたからな、自分の闘い方を確立しているしちょっとやそっとじゃ負けやしない。それこそ造物主クラスを連れてこなければ負けないだろう。

「そういえばライナは？」

あいつ最近訓練をサボるようになってきたんだよな。

なんか「睡眠至上主義に目覚めたから寝る！！という訳でお休み。」とか宣言してから至る所で寝てるんだよ。

気配遮断も異様に上手くなって俺でも見付けるのに苦労するし、エヴァでは見付けることも出来ない。

「ライナだったら魔法球にいると思う。ほら、父様が私達に渡した個人用の……」

「そうか……」

確かライナは魔法球の時間設定を現実の一時間を魔法球内では一週間にしていたな。

「エヴァ、二時間で戻る。」

「あ、あぁ……」

後で聞いたがこの時の俺の顔はとても黒かったらしい。

所変わって魔法球内。

陽射しは暖かく気持ちよい、辺り一面の草原には二本だけ木が立っている。

その二本の木にはハンモックが繋がれており、そこで眠っている金髪の顔立ちの整った青年。

「ラァァァイィナくぅぅぅん♪」

「うわっひゃあ！！　あ、うわ！！」ドスン

ハンモックの上で文字通り飛び起き、そのまま地面に落下した。

「いてて、せ…先生……どうしたんですか？」

「修行」

「いや、そんな、もう修行なんて……必要無いじゃないですか。」

「ほぉ……そうかそうか、自分はもう十分強いから、これ以上強くなる必要はないと……そう言うことか？」

「別にそう言う訳では……」

「言うな言うな、それだけ自分に自信を持ってるのは大したもんだ。」

「いや……その……あの……」

「しかし、それだけ自信があるんだったら、俺も自分の力を試してみたいな。もちろん、全力で……」

右手のリストバンドを外そうとすると。

「すいませんでした！」

「よし、分かれば良い。
次したら一週間耐久サバイバルするぞ。」

耐久サバイバルは一定期間、俺が隙を見つけては石かナイフを投擲する訓練だ。

一瞬たりとも気を抜けず、見えない相手を警戒し続ける緊張状態で過ごすかなり過酷な訓練だ。

もちろん、怪我ですむ加減でちゃんと狙って投げてるぞ。

「うぅ……僕に優しい世界は無いのか……」

「無ければ作れ、あるいは俺を超えろ。」

「そんな無茶な……」

「さっさと始めるぞ。これが終わればいくらでも寝させてやるから。むしろ、終わっても意識が残ってるなんて期待するなよ。」

刃引きされた剣を三本取り出してライナに二本渡してやる。

「左剣に『魔力』
右剣に『気』」

「気と魔力、反発する二つを同時に扱うか、どうせなら合成させれば更に強力になるのに。」

「まずは剣術だけで行きたいですから……ねっ！！」

ガギン

ライナが突っ込み、気を纏った剣で斬りかかる。

「剣速は変わってないな。けど、前より軽くなってるぞ」

「はあぁぁぁぁぁ！！」

二振りの剣で袈裟斬り、切り上げ、切り払い、こちらに攻撃の暇さ

え与えないような連激を繰り出してくる。

「速さや連携は良いんだが、やはり、軽いな。
ただでさえ、片手振りで軽いんだからそこを埋める工夫をしないと。
気と魔力の合一を使え。
出力不足を補うには今のお前にはそれしかないだろ。」

話している最中も攻撃は続いていたが、言い切った時にライナがバックステップで距離をとった。

「はぁ…はぁ…『魔力』『気』『合成』」

剣の腹をクロスするように合わせるとライナの体を光が包み込む。

気と魔力の合一。
気と魔力を融合させ、体の内外に纏い強大な力を得る高難度技法。

魔力や気を直接見えるライナとは相性が良いと思い教えたが、ここまでのレベルにするとは。

「行きます！」

「おし、来い！」

ガギギィン

「むぅ。」

剣速も上がっているが、重さは段違いだ。

何だかんだ言っていじめてみたが、こいつは剣だけでもかなり強くなってるな。

気と魔力の合一を使ってる時はバランスが崩れるから魔法は使えないが、前衛で十分やっていけるな。

「今度はこっちから攻めるぞ。」

剣に魔力を纏わせて、瞬動を使いライナが十分知覚できる速度で接近する。

「くっ…！！」

キン

「え？軽っ？」

「影のフェイクだ。」

「後ろ！」

キン

「そっちもだ！」

ドカッ！

「かはぁ……」

正面から斬りかかったフェイク、後ろに回り込んだフェイクの二つの攻撃は防げたが、フェイクの影に隠れていた俺の本体には反応仕切れなかったようで、もろに後ろから攻撃を受けた。

「正面から不意を撃つ。実力が開いたりしていても案外あっさり勝てるかもしれないぞ。
ま、この手は複写眼を使われればお前には通用しないけどな。」

「ぐ……卑怯者……」

「おいおい、相手の不意を衝くのは戦闘の基本だろ？
如何にして相手の隙を衝くかが勝利への道だ。」

「なら……スイミン・アンミン・バンザイ風精召喚・剣を執る戦友」

「その始動キーは代えた方が良いと言ったはずだろ……」

一応説明しておくと、始動キーは自分の専用の魔力通路の鍵になる、その設定には儀式が必要だが変更することもできる。

「始動キーは置いておいて、風の中位精霊による複製……それを２０体の同時召喚か……」

「時間稼ぎを頼む。」

ライナの姿をした精霊が、槍、片手剣、大剣、双剣、大鎌等、様々な武器を持って襲ってくる。

「スイミン・アンミン・バンザイ契約に従い、我に従え、高殿の王。来たれ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻」

「やっべ、詠唱完成さしちまった……」

精霊は全て倒したが、その間に詠唱を終わらせられた。

「『千の雷』！！」

超広範囲雷撃殲滅魔法で雷系最大呪文、千の雷。
数えきれない程の雷が降り注いでくる。

まともにくらうと流石に少し痛いので、俺も翼を広げ、紋様に魔力を籠める。
すると、紋様は金色に輝き始め、俺の前には複雑な魔方陣が展開される。

「“バシレイユ・ビオレゲンス”」

魔方陣から、多数の光線が放たれ、ライナの『千の雷』と拮抗する。

「うわあああああ！！　それはホントに卑怯だあああああああああ！！」

拮抗したのも僅かな時間で後はあっさりと光線に呑まれていった。

「……もう、のんびり眠ってて良いぞ」

ついつい、力加減を間違えてしまった。

“バシレイユ・ビオレゲンス”が止んだそこに残っていたのは黒焦げの何かだった。

「殺ってしまったか……？」

「う……ぁ……」

「うん、生きてるな。」

でも、これ以上は可哀想かな。

しばらくはこいつがどうするかに任せるか。

俺としては造物主と勝てないまでも互角か、最低限逃げ切れる程度の実力は身に付けて欲しいんだが……それは高望みか？

「はぁ……成るようにしか成らないか。」

ライナに治療を施して魔法球から出る。

中にいた時間は数時間だったが、外ではまだ十数分しか経っていなかった。

「ずいぶんと早かったな、父様。
二時間じゃ無かったのか？」

「あぁ……ちょっとだけ、やりすぎた。」

「それは……御愁傷様だな。」

一応は生きてるぞ。

「楽しくてつい、な。ホントについ、だが。“バシレイユ・ビオレゲンス”を使った。」

「あれを使ったのか……」

エヴァは顔を引きつらせながら続ける。

「あれは魔力を使っているから魔法なんだろうが、恐らくあれを超える魔法なんて存在しないんだぞ。

ライナの複写眼でも構成を読み取れないらしいし。」
そりゃ、元が天使の使っていた魔法だからな。
人間に理解しきれるモノじゃないだろ。

「……エヴァは……」

「ん？」

「エヴァはどこまで強くなりたい？」

「…それは……父様に守られるだけではなく、父様やライナを守り一緒に戦える位になりたい。」

はっきりと自分がどうなりたいかを答えるエヴァ。

見た目十才の女の子が言うのもどうかと思うが、そこまで決めていたら大丈夫だろう。

「ライナは抜かれるかもしれないな。」

「何か言ったか？　父様。」

小声で言ったつもりだったが、エヴァには少し聞こえていたようだ。

「何でもないよ。」

言ったことを誤魔化すようにエヴァの頭を撫でてやる。

エヴァも特に抵抗もせず、目を細めて気持ち良さそうに撫でられている。

和むわ～

因みに俺達の実力は――――

俺　偽善＞＞＞安楽＞＞（越えられない壁）＞＞造物主＞＞＞＞＞＞＞ライナ≧エヴァ

――――――位かな。

ライナとエヴァは種族と魔眼の違いで微妙だが、技術や練度の点からすれば、ややライナの方が上だ。

この先、エヴァが修行を続けてライナがさぼればすぐに入れ替わる

だろうが。

「む？」

結界から異変を感じたのでエヴァの頭から手を放す。

「どうしたのだ？」

「侵入者だ。」

第七話（後書き）

バシレイユ・ビオゲレンスはオリジナル魔法みたいな物です。

前作で使っていたのをそのまま使いました。

しかし、主人公は神からもらった能力を使いませんね。まぁ、必要無いんですが。

第八話（前書き）

この話は悩んだ、とにかく悩んだ。

でも、出来があまりよくない。

あぁ、文才が欲しい。

第八話

侵入者は初老に入ったと思われる外国人の男だった。

最近は明治維新だなんとかで外国人も珍しくなくなってきたからな。

珍しいは珍しいか。

「何か用か？　ここは私有地なんだが。」

名義は俺じゃないけどな。

「私は貴方に交渉したい事があってこの地を訪れました。話を聞いてもらえませんか？」

随分、流暢な日本語だな。

日本生活が長いのか。

それに話を聞く位なら良いか、他に気配も感じないし、俺達の賞金目当てでもなさそうだ。

「分かった。ついてこい、家まで案内する。」

俺はこの男を家の客間まで案内した。

「コーヒーと紅茶……緑茶もあるが…何にする？」

「すいません、紅茶でお願いします。」

「おーいエヴァ、紅茶とコーヒー頼む。」

「了解、父様。」

「で、交渉というのは？」

「その前に自己紹介を、私は魔法協会の理事をしております、ロバート・メーディスと云います。
どうぞ、よろしくお願いします。」

頭を下げる外国人改め、ロバート。

「俺は七々己　一希だ。
特にこれといった肩書きはない。」

「ご謙遜を私達の間で貴方の名を知らない者は居ませんよ。」

「……なんの事だか良く分からんな？
俺はそんな有名人でも無いんだが。
それよりも交渉の内容に入ったらどうだ？
あまり前置きが永いと……こちらも暇ではないからな。」

「すいません、ほんの冗談のつもりだったんですが、気分を害したのなら謝ります。
どうか殺気を抑えて下さい。この老体にかなり辛いです。」

「そうか……」

無意識だが、殺気が少し漏れていたか。

「持ってきたぞ、紅茶と……コーヒーだったな。」

「ありがとうございます。」

「サンキュー、エヴァ。」

「……父様、私は部屋に居るぞ。」

「あぁ、そうしてくれ。」

エヴァが部屋を出てから会話を再開する。

「さて……さっさと内容に入ろうか。
魔法協会理事殿」

次ふざけた事抜かしたら殺す。と、暗に気配で示す。

「そこまで警戒しないで下さい。と言っても無理ですね。
ごほん、実は今日はお願いがあって参りました。」

「お願い？」

「はい、この土地を我々に貸して貰いたい。そして、出来れば譲って貰いたい。」

「それは……俺の一存で決めれることではないな。
少し待ってろ。この土地の正式な所有者を連れてくる。」

ヘルメスドライブを使い偽善の居場所を探す。

「あ？」

「どうされました？」

「いや、何でもない。少し席を外すが待っててくれ。」

探してみたが、どうやらあいつは魔法世界とも違う別の世界にいるようだ。
所謂異世界だな、流石にヘルメスドライブでは異世界間の探索は出来ても移動は出来ない。

仕方なく解空（デスコレール）で空間に裂け目を生み出し、そこを通って偽善のいる世界に渡る。

「……やっぱり、世界移動は負荷がかかるな。
早いとこ抜けよう。」

少し足を速めてこの空間を抜ける。

「到着。ここは……体育館か？
潰れてるみたいだから、廃校舎かなんかか。
ま、人が居ないならその方がいいが。」

ここまで来れば、ヘルメスドライブでも移動出来るな。

「あれ？　ヘルメスドライブに出ない？
どういう事だ？」

振ったり叩いたりしてみるがまるで反応がない。

「はぁ…仕方ない。適当に探すか。
人を待たせてるからあんまり時間かけたくないんだけど……はぁ…」

あ、霊絡を探すか、あいつの霊絡は色が黒いからな。
すぐに分かる。

そうと決めれば、集中して霊絡を探す。

「数は少ないが、変な霊絡があるな。」

死神の霊絡とは違った赤い霊絡や橙色の霊絡、無色に限り無く近い灰色の霊絡。
黒い霊絡もその近くにある。

「あっちか、行くかな。」

霊絡を追うと、体育館から出て校舎へと入って行く。
そのまま、階段を登って……

「こんな所に血が、まだ新しいな。」

階段の途中には血や爪、歯が落ちていた。

それでも構わずに登ろうとすると、上から狐のお面の被った男が下りてきた。

「何でそんな物を被ってるんだ？」

「さっき、人類最悪から盗んで来たんだよ。

人類最強と人類最終の勝負に人類最強が勝ったから、人類最悪は賭けをしていた人類最低に殺されるんだ。
だから、死ぬんだったらもう要らないかな？と思って盗んで来たんだよ。」

「ちょっと、待て。話がややこしくて分かりにくい。つまりはどういう事だ？」

「つまり、最強と最低と最終と最悪の揃い踏みだね。」

「おーけー。分かった。意味不明だ。
それはそれとして、俺はお前に用事があったんだ。
なんか、偽善、お前の土地を貸して欲しいって奴が居てな。
その交渉を俺がするのもおかしいと思って呼びに来たんだよ。」

「へぇ、そうなんだ。
それにしてもよく僕を見つけられたね。」

「逃げ隠れするのが異様に上手い奴が居てな、その性だ。」

「ふーん……」

「もう良いか？

良いんだったら、道を繋げるけど。」

「あ、うん。良いよ、繋いじゃっても。」

解空（デスコレール）を使い、家まで道を繋げる。

「行こうか。」

「そのお面は被ったまま行くのか……？」

偽善が被ったままの狐面を指差しながら聞く。

「気に入ったからね。」

「……そうかい。」

こういった時の対処法は心得ている。

無視だ。

偽善を無視して裂け目に入っていく、二人分の広さに作ったから行

きより負荷が大きい。

「到着……ふぅ…疲れた。
理事さん。こいつがこの土地の正式な所有者だ。
交渉はこいつに頼む。」

「どうも、人類最悪の魔法使いです。」

「魔法協会理事をしております、ロバート・メーディスです。此度はよろしくお願いします。」

うーん、理事にもなるとこのおかしな自己紹介にすんなり対応出来るもんなんだな。

狐面を被った学ラン姿の人物を目の前にして、落ち着いて応対するとは……。

まぁ、面倒な交渉事は偽善に丸投げ……するのは不安だけど……して、俺は後ろで聞いとくか。

偽善と移動していた時に、俺の、ここに家を残しておきたい。という要望は伝えたしな。

「そ、そんなこと！！」

ドスドスドスドスドスドス

偽善がとんでもないことでも言ったのか、大声を出すロバートだが、次の瞬間には顔の左右に一本づつ、胴の左右にも一本づつ、さらに足を固定するように二本。計六本のネジでロバートを動けなくしていた。

て言うか……

「ソファーが穴だらけに……」

この家は武家屋敷だが、ヨーロッパ出身が二人居るから一部の部屋を洋風にしていた。

この客間もその一室だ。ちゃんと和風の客間もある。

今回は外国人の客だから、この部屋に案内したんだが……こうなるとはな……

「で、どうかな？」

「い、いぇ、しかし……」

「（パチン）……」

指を鳴らすと、偽善の後ろに出現する。武器の数々。

魔力を感知出来る者なら、武器の一つ一つに凄まじい魔力が込もっているのが分かる。

「で、どうかな？」

これは交渉やお願いじゃないな、これは完全に脅迫だ。

「分かりました。その件、全力を持って取り組ませて貰います。」

「うん、よかったよかった。
じゃ、今言った条件を守るなら、この土地を貸してあげるよ。」

「はい……」

交渉（脅迫）は終わったようだな。

条件が何かは聞いていないが、それは偽善が決める事だろ。

「それでは報告等も有りますので、私はこれで失礼させてもらいます。」

肩をがっくりと落として帰っていくロバート。

一体どんな無理難題を吹っ掛けたんだろ。

「さて、話し合いも終わったし、君たちもこのままここで暮らせるように言っといたから。」

「サンキュー、それは助かる。
ところで気になってたんだけど、安楽は？
お前が独りなんて珍しいだろ、いつもはべったりのくせに。」

「あぁ……安楽ちゃんね……今、ちょっと喧嘩してるんだ。
魔法世界のとある王国の姫様と仲良くしてたら嫉妬されてね……。
お互い……冷静になるために少し距離をとってるんだよ……。」

「そうなのか……なんか…悪かったな、変なこと聞いて。」

「いや、いいんだよ。
ただ、魔法世界にも居づらくなってね。

それでいろんな世界を回ってたんだ。
そういえば、僕達が前に居た世界にも行ったよ。
もう新しい魔王が現れていてね。なんだか、糸を使う女勇者が活躍していたよ。いやー向こうとこっちじゃ時間軸が違うみたいで、まだ二年しか経っていなかったよ。それとね、アネリアさんという人にも会ったよ。
あの人は神を超えているね。
僕の能力が全て通じなかったし、見稽古でもまるで見取れなかったよ」

「そうか……懐かしいな。」

今の俺ならアネリアさんにどれだけついていけるだろうか？

それにミコも向こうで元気にやっているようだし。

ヤバい泣きそう。

「何をしてるんですか先生。
あ、お客さんですか、こんばんは。」

「こんばんは。」

「おう、ライナ。なんだもう夜か。」

少しばかり感傷に浸っていたら、思った以上に時間が経っていたようだ。

「そうですよ。もう夕食の時間ですから呼びに来たんですよ。お客さんの分も用意してありますから、良かったら食べていって下さいね。」

「ありがとう、ライナちゃん。もちろん頂くよ。」

「ちゃん……？」

「ライナ、気にするな。こいつはこういう奴だ。」

「そうですか、分かりました。気にしません。」

「ひどいな～」

「ほら、行くぞ。早く行かないと飯が冷める。」

偽善を急かしながら、移動する。

「ところで、ライナちゃん。」

「はい？」

「君、複写眼保持者だよね。」

「え？　なんで……」

「君に教えたい魔法があるんだ。
しばらくはここに厄介になるから、その時に教えるよ。」

「しばらくって、さっさと仲直りしろよ。」

「僕も仲直りしたいんだけどね。
光の無い目でドス黒い瘴気を放つ安楽ちゃんを見ると……ね。
話をした相手はまだ六歳の女の子なのに……
計画に必要な事なのに……
解って貰えるまで待つしかないんだよ！」

そこまで切羽詰まってるのかよ。

「まぁ、この土地の事で借りもあるし、落ち着くまでいくらでもいろ。な。」

「うん。ありがとう。」

「さぁ、飯にするぞ。」

三人で食堂に入ると。

「遅い！！」

腕を組んで仁王立ちしているエヴァが居ました。

「人を呼びに行くのにどれだけかかっているんだ！」

「いや、その……」

「ねぇ……」

「なんだ？」

「どこでも誰でも、男は女には勝てないんだね。」

「惚れた弱味だろ。」

むしろ真理か？

「父様も……その人、誰？」

「ん、そうか。エヴァは客をロバートだと思ってたんだな。
こいつは偽善。
友人みたいなもんだ。」

「どうも、エヴァンジェリン・A・K・M・ナナナナミです。」

ちょんちょん「なんだよ？」

「僕は今、女性とは会話出来ないんだよ。」

「はあ？」

「なんでか分からないけど、安楽ちゃんは女の勘とかで僕が女性と会話したのが判るらしいんだよ。」

「どんな超能力だよ。」

「知らないよ。けど、確実に判るんだよ。」

「でぇ、どうするんだよ。」

「通訳して。」

「うわっ、めんどくせぇ。」

「とりあえず事情を説明して、無視する訳ではない事を理解してもらって。で、僕のことも君が紹介して。」

エヴァにこいつの名前と、とにかく女性と会話出来ない事、狐面は外せないことも教えた。

エヴァもよく分かっていないようだが納得はしてくれた。

話も終わったし。

ようやく飯にありつける。

全員で手を合わせて

「「「「いただきます。」」」」

この文化は、俺が二人に教えたんだ。

いただきます。と、ごちそうさま。は世界に誇れる文化だと思う。

「「え？」」

ん、どうかしたのか？

「「お面、外すんですか？」」

「『これを付けたまま食事する方法なんて知らないしね♪』

『外さないと食べれないよ』」

あくまでも、ライナだけを見て答える偽善。

外せないとか言ったんだけどなぁ。

〜〜〜おまけ〜〜〜

「ギゼンさんが……女の人と食事している気がする……私……嫌われたのかな……もし……もし……ギゼンさんに……嫌われたら……ふふふふフフフフ負負負負怖怖腐腐斧腐腐……こんな世界……もう要らない……全部……ぜんぶ……コワシチャオウカナ？」

完全なる世界のメンバー一同は思った。

（ギゼン、何でもいいから戻って来い！！
世界が危ない！！）

この時、食事をしながら偽善は、背骨の代わりに氷柱をぶちこまれたような感覚を味わったらしい。

第八話（後書き）

渡った異世界が何処か分かりますか？

『人類最低』は『欠陥製品』にするか考えたんですが、語呂を良くするために『人類最低』にしました。

第九話

あの魔法協会理事はここに学園都市を造りたかったらしい。

業者の人達が入って来て、最初は何事かと思ったが、偽善が説明してくれた。

工事も二年程であれよあれよと言う間に完成させた。

「なんだかな～魔法協会の拠点を、わざわざ学園になんかしなくていいと思うんだけど。
そこら辺はどうなんだ？　終身名誉生徒会長様？」

「『いかにも！』
『その通りだね』
『日本には古来から呪術協会あるから』
『そことは絶対争うだろうね』
『それなのに』
『一般人も入る可能性の高い物を建てるなんて』
『一体何を考えてるのやら……』」

この終身名誉生徒会長という肩書は、偽善が要求した条件だ。

まだ、生徒が一人も居ないのに生徒会長を名乗っている。
後、なんのこだわりか……変な猫の着ぐるみを着ている。
もう慣れてしまったが。

「反対しろよ……」

「『一応』
『名目は見習い魔法使いの育成』
『だからね』
『これなら人にものを教えてても不自然じゃない……かな』
『それに面白そうだったし』」

「生徒はいつから採る予定なんだ？」

場合によってはこの家の結界を強くしておかないと。

「『生徒はもう二年後だね』
『教員をまだ集めきっていないし』
『ここの設備もまだ完全じゃないみたいだしね。』」

「まだまだ、準備が出来ていないんだな。
……エヴァとライナも通わせてみるか……何年後になるかは分からんが。」

「『原作開始時には通ってもらうよ』
『説得については君に任すけど』」

「また、原作か。
いい加減内容を教えてくれよ。
ネギま、が何かの物語なのかは分かっているが、内容を俺は知らないんだよ。
時々現れる転生者は原作の事知ってるんだぞ。
俺も知りたいよ。」

「『だめだよ』
『その方が面白そうだし』」

「そんな理由か……慣れてしまった自分が嫌だな。」

「『よろしい』」

「なんで、上からなんだよ。」

「『なんとなく？』」

「なんで、疑問形なんだよ。」

「『おっと』

『そろそろ安楽ちゃんが僕を許してくれた気がするから帰るね』」

「唐突過ぎるだろ。……で、ライナとの約束は？」

「『お預けかな？』

『君は伝勇伝を読んでないから教えられないだろうしね』」

「求めるは雷鳴》》稲光（いづち）！！」

「『求めるは侵入》》蝕走（しら）！！』」

突然、放たれた雷撃を偽善は黒い霧を出して防いだ。

「お帰り、ライナ。」

「『ひどい挨拶の仕方だね』」

「ただいま先生。それと、やっぱりキャンセルされましたか。」

「厄介な相手と厄介な約束しちまったな。お前も……」

「『残念だったね』
『時間切れだよ』
『結局僕にその魔法で一撃も与えられなかったね』
『ということで』
『その眼についての秘密は教えてあげません』
『じゃ』
『僕はもう帰るから』
『エヴァちゃんにもよろしくね』
『バイバイ』
縁が合ったらまた会おうね。」

「おう、またな。」

そして、偽善は最初から居なかったように消えた。
……着ぐるみのままで。

「偽善さんの移動方法は複写眼でも解析出来ないんですが……魔力や気は使ってないんでしょうか？
……はぁ…考えても無駄でしょうね。
寝るとしますか、お休みなさい、先生」

「お休み」

原作か……この世界の大筋はもう決定してるのかな？

あるいは、俺と二人がここで生活しているのも原作通りなんだろうか？

いや、俺は１００％イレギュラーだろう。

ライナも偽善曰は転生者らしいし。

前世の記憶や神様と会った記憶も無いらしいけど。

「まぁ、自分が思うように生きるさ。」

原作の内容なんざ知ったこっちゃない。

自分で考えて、自分で決めるさ。

エヴァもライナも家族だ。

転生者はエヴァを狙う奴が多いからな、家の娘に手を出す奴は潰す。

今はそれでも良いだろ。

しかし、なんだかんだで偽善は一番付き合いの長い友人だしな。

あいつの頼みぐらいは聞いといてやるか。

今から１００年以内に起こる魔法世界の戦争の介入。

どこに味方しても敵対しても良いから、とにかく参加する事。

ついでにライナも連れてくる事。

なんで、あいつはライナの事を気に入ったんだろ？

昔、あいつが面白いことがあるって言っていたヨーロッパで拾ったのに。

「まぁ、これも考えるだけ無駄だな。
そうだ、確か、今日の飯当番俺だったな。
早く支度しないと。」

こんな、日常でも良いよな……

～～～おまけ？～～～～

「ギゼンさ～～～～ん」

「安楽ちゃ～～～～ん」

ひしっ、と抱き合う二人。

今まで喧嘩をしていて、長い間顔も合わしていないとは信じられない程、自然に再会していた。

「ごめんなさい！　ギゼンさん。
デュナミスさんに言われてやっと気付いたの、あれは計画に絶対必要な事だって。」

「『良いんだよ安楽ちゃん』
『分かってくれたら』
『もうそれだけで良いんだよ』」

「ギゼンさん！」

さらに、抱きしめる力を強める安楽。

「『安楽ちゃん』」

それに応えるように抱きしめる偽善。

そんな仲睦まじい二人を見ていた。完全なる世界一同は、

（仲直りしたのはいいんだけど……なんでギゼン？は着ぐるみなんか着てるんだ？）

まだ、偽善は猫の着ぐるみを着ていたようだ。

着ぐるみを着ているのに偽善と分かった安楽は一体？

「ギゼンさんの事で分からない事なんかありません。

たとえ、変装しようが変身しようが分かるんです。」

……だそうです。

～～～おまけ？2～～～

「『ありがとう』
『デュナミスちゃん』
『安楽ちゃんを説得してくれて』
『これはお礼だよ』」

王の財宝から日本酒を取り出して渡す偽善。

「気にするな。あぁでもしなければ世界が滅んでいた。」

酒を受け取りながらも軽く流すデュナミス。

「『そんなに大変だったの？』」

「我が主と協力して説得を繰り返していたのだが、呪詛のようにお

前の名前を延々呟いていたりしていたな、一時はこの世界が負の感情で覆い尽くされようとした程だ。あの時はもう駄目かと思ったぞ。」

「『そうなんだ』
『愛されてるなぁ僕って』」

「なぜ、そう解釈できる？
お前が子供と会話しただけで世界が滅びかけたんだぞ。」

「『女の子の嫉妬なんて可愛いものだよ』
『男なら』
『それも受け入れなきゃね』」

「……アンラに…」

「『え？』」

「お前がウェスペルタティア王国の女王を口説いていた。と言ったら……どうなるかな？」

「『そんな事をしたら』
『それは……その……』

勘弁してください。」

括弧つける余裕もなく土下座しながら言い放つ偽善。

つい、数十秒前に、女の子の嫉妬ぐらい受け入れなきゃね。と言っていたのと同一人物か疑わしくなる程である。

「冗談だ。そんな事をすれば世界が崩壊するだろうな。正と負のバランスが崩れてな。
それはもう良いとして、偽善よ。
何故、お前はそのような被り物をしているのだ？」

「『なんでって』
『かっこいいでしょ！』
『これって！！』」

猫の着ぐるみを着たままポージングしている。

それを見ているデュナミスは

「そうだな……」

突っ込むことを放棄した。

「この酒は良いものだな。
さっそく、頂くとしよう。」

そこから、デュナミスは独り酒を楽しんでいた。

第九話（後書き）

次から大戦に入ろうと思います。

一希をどの勢力に入れようか考えながらですが、おもしろく書けるよう頑張ります。

第十話（前書き）

少し遅れてすいません。

やっと書き上がりました。

第十話

「そろそろ時期かな……」

偽善が帰ってから更に５０年程経ったある日、俺はふと思った。

あいつの言っていた事。そう、戦争だ。

ちなみに、こっちの世界でも戦争はあったんだが、俺はそれには関わらなかったけどな。

「ん～……行き先は魔法世界のどこかにランダムで繋がるようにすれば良いかな？」

どこにつくかは運次第という方が楽しいだろ。

「後は、ライナは連れて行くとして……問題はエヴァだな。」

自室で着々と準備をしながら計画を練る。

「俺としてはエヴァには留守番を頼みたいんだが……一人で残し

ていくのもなぁ……サテライト３０の分身を置いておけば大丈夫かな？
あれも、俺だしな。」

善は急げと、一番近くにいる俺をこちらに向かわせる。

俺だから到着にはそんなに時間はかか「何の用だ？」

「やはり、速いな。
ま、用事というのは単なる子守りだ。
俺が居ない間、エヴァの相手をしててくれ。」

「その位ならお安いご用だが……どうかしたのか？」

「うん……まぁ……口で説明するのも面倒だから、記憶の共有使うぞ。」

「それなら、すぐに理解できるな。」

数秒で共有を終わらせる。

「たしかに面倒事だな。」

「だろ。」

「そんな訳だから、しばらく頼むわ。」

「りょーかい。」

次はライナだな。

「ライナー、魔法世界に行くぞ。」

「は？」

突然の発言にきょとんとするライナ。

「今から、行くから４０秒で支度しろよ。
言っとくけど、拒否権無しの強制な。」

「え？　え？」

「１０秒経過ー、残り３０秒ー」

「は！」

慌てて行動を開始するようだが、実はこの後、エヴァにも話をするから時間はあるんだけどな。

バタバタと支度するライナを放っておいて、エヴァの所に行く。

「エヴァ。」

「なんだ？　父様。」

エヴァの部屋はぬいぐるみで溢れていて、かなりファンシーな趣だ。

……武家屋敷に合わないな、しばらくこの家も離れるし、出会った時に造ったログハウスを少しいじって渡しとくか。

この家に俺の分身が居るし、チャチャゼロも居るがそれでも手広だろ。

「実は、しばらく家を離れるんだ。
魔法世界に用事があってな。」

ライナと対応が違い過ぎる？
そんなもん、エヴァの方が上に決まってるだろうが。

「用事？　一人で行くのか？」

「いや、ライナも連れていく。
一応分身は置いていくつもりだが。」

「そうか、分かった。」

簡単に納得されるとこっちも対応に困るな。
簡単なのは何よりなんだが……あっさりし過ぎてるのもなんというか……

「随分、あっさりと済ますんだな。てっきりもっと駄々をこねると思っていたんだが。」

「父様の突飛な発言も慣れたさ。
それに、父様は心配するだけ無駄だしな。
ライナも父様がいるなら大丈夫だろうし。」

そうかい、信頼されてるねぇ。

「じゃ、エヴァには留守番頼んだぞ。俺が居ないからって魔法協会の連中が攻めて来ないとも限らないし。」

「任せておけ。人間ごときに遅れはとらんわ。」

思ったよりもエヴァの説得はあっさりといったな。

さて、ライナは準備が出来てるのかねぇ。

俺の場合、持って行くのはこの剣だけで良いしな。

「ライナ、準備は出来たか？」

「はい。完了しました。」

「……取り敢えず、ベッドは置いていけ、必要ない。」

背中にくくりつけられているベッドを含めた寝具一式。

一人でどうやって、くくったんだよ。

「しかし、野宿の事を考えると。」

「お前は野宿をどれだけ快適にすごしたいんだよ！」

「え～」

不承不承という感じで背中のベッドを器用に下ろす。

「よし、準備は出来たな。
もう行くぞ。」

「ところで、魔法世界のどこに行くんですか？　何か予定でも？」

解空で空間に裂け目を生み出しながら答える。

「行き先はランダムだが安心しろ、地図とガイドブックは持っているから。」

ガイドブックの名前は、魔法世界の全て、
なんでここまで詳しいんだ？と思える位の情報量だ。
偽善と安楽の所属している、完全なる世界、の　アジトの場所まで載っている。
おまけに魔法で自動更新機能付き。
既に絶版物で持っている奴は極少数だろ。

「そんな無計画で……」

「よし、繋がった。
さてさて、何処に繋がったのかな？」

本当にランダム。行き先は魔法世界としか定めていないから、何処に行くかは俺にも分からない。

「さぁ、行くぞ。」

「はぁ……」

ライナは色々と諦めたようで、大人しく裂け目に入って行く。
俺も続けて入り、ライナと並んで進んでいく。
ようやく見えた出口の先には、

『カアアアアアアア』『ギチギチギチキチキチギチ』『ギャヤエエエエエエエ』『ハァアアアアア』

「何ですかここ？」

「えぇ…多分これだな。
――――魔獣蠢くケルベラス渓谷

魔力や気は一切使えず、その谷底は魔法使いにとってまさに、死の谷，と呼ぶに相応しいでしょう。
古くは処刑にも利用され、その残虐な方法は恐れられていました。
ここは観光にはおすすめ出来ませんね。もし、逝くのであれば遺書を残しておきましょう――――だってさ。」

「……」

辺りにいるのは蛇を千倍位巨大化して、凶悪にしたような魔獣達。

「とりま走れ。」

「はい。」

脱兎の如く走り出すライナ。　俺は霊子を固定化して谷を登って行く。

霊力は問題なく使えるようだ。

『ギシャアアアアアアア』

魔獣の一匹が大口を開けて俺を喰おうと襲い掛かって来る。

あ、こいつ口の中に口が三つ位ある。

「そぉい。」

勝手に入って来たのはこっちなので、斬るのも忍びなく殴ることにした。

『ギュエッ』

「意外と弱いな。」

これならライナも余裕で逃げ切るだろ。

魔獣の届かない高さでライナが走っていった方向に向かう。

「居た。」

空中で膝をついてぜぇはぁ言っている。

「お疲れ。」

魔法や気での強化なし。
純粋な身体能力で走り続けりゃしんどいわな。かすれば即死の魔獣に追われながらじゃなおさらだろうし。

「先生、次からは考えて場所を選んで下さい。かなり切実に願います。」

「善処しよう。」

「次はどうするか……この近くの建物なんて、ケルベラス無限監獄（オコジョ収容所も併設），しかないしな。
賞金首が監獄なんか行ってもなぁ。」

「（オコジョ？）そうですね。
自首なんかする気はありませんし。」

ガイドブックをペラペラめくりながら考える。

「お、ここに行こうかな。
ヘラス帝国・帝都ヘラス。ヘラス帝国は亜人の国らしいから、翼を出しっぱなしにしてても大丈夫そうだし。
それに剣闘場なんてのもあって、そこで剣闘士として闘えば金がもらえるみたいだぞ。
ここに剣闘士の登録方法まで書いてある。」

「なんで、ガイドブックにそこまで詳しく？
見た目の厚さ１００ページもありませんよね？」

「解らん、なんでか知りたい情報は全部載っているんだ。」

「ちょっと見せて下さい。」

「ほれ。」

「ありがとうございます。
……これはっ！！」

何が書かれているか気になって覗いて見る。

――――帝国の快適寝具１００選！
これであなたも快眠間違いなし。――――

「なんでやねん……」

ガイドブックに載るような内容じゃないだろ。絶対に。

それでも、キラキラした目で読んでいるライナ、時折「おぉ…」や

「うぁ…」等と声を漏らしている。

このままでは、いつまでも読んでいそうだから、ガイドブックを取り上げる。

「あ……」

めちゃくちゃ名残惜しそうにするライナ。

「はぁ……まずは帝都に行くぞ。
方角は北東な、俺も行ったことがないから、このガイドブックと地図……は必要かどうかは微妙だが、これを頼りに向かうぞ。」

「帝都……寝具……さぁ先生、早く帝都に向かいましょう！」

気合いを入れるのは良いが、残念ながら金を渡してないからすぐに買い物なんか出来ないぞ。

いつ気付くかな？

……

帝都へラスに到着した。

跳んだ？　今更だろ。

それに特筆するようなことも無かったしな。

まぁ、強いて言えば、メガロメセンブリアの艦隊とガチバトルしたり、５００年物の古竜とバトったりしたぐらいだな。

な、大したことは無いだろ？

あぁ、後ライナは帝都に着いた瞬間「先生少し買い物をしてきます！」とか言って駆け出そうとしたが、俺の「金は？」の発言ですぐに沈んだ。

「働かざる者食うべからず。
てな訳で、さっさと剣闘士として登録しに行くぞ。
早ければ当日にも試合出来るみたいだし。」

「先生……一文無しって、宿とかはどうするんですか？

帝都まで来て野宿は嫌ですよ。」

金は人生七回遊んで暮らせる位は持ってるぞ、こいつには教えないけどな。

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるって。
さぁ、行(ドゴオオン)なんだ？」

「キャーー」

「何だ何だ？　野試合か？」

「オイッ！　警備呼べっ！」

「……どうやら野試合が盛り上がり過ぎて周りに被害が出たようですね。」

「だな。　お、あいつらじゃないか？」

闘っているのは、頭に大きな角を生やし、褐色の肌をしたヘラス族の男と、魚？のような顔をした魔族の多分男。

「白き雷！」

「紅き焔！」

建物の上を飛び交いながら、魔法を撃ち合っているが、外れた魔法が建物に当たって被害が出ている。

「周りの迷惑も考えろよな。
はぁ……うるさいし止めとくか。
行け、ライナ。」

「僕ですか！」

「来たれ深淵の闇、燃え盛る大剣！！
闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焔！！
我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くす者！！」

「来たれ雷精、風の精！！
雷を纏いて吹きすさべ南洋の風！！」

あの魔法はヤバイな。

「ライナ、あの馬鹿共に‘戒めの矢’か‘縛呪’。」

「はい。」

「‘雷の暴風’！！」

「く、‘奈落の業火’！！」

詠唱の分、‘雷の暴風’の方が速いな。

関係ないけど。

影を広げて二人を丸々包み込む。

「影の牢獄……なんてな。」

中で二つの魔法が激突し爆発するが、周りへの被害はゼロに抑えた。

「解くぞ、準備はいいな。」

「オッケーです。‘魔法の射手・戒めの風矢’」

影を解いて落下していく黒焦げの二人をライナの魔法が捕らえる。

これが、ここらの剣闘士のレベルだろうな。

捕縛された二人は、警備兵に連行されていった。

「貴女方が捕縛して下さったんですね。
ご協力、感謝します。」

「別に良いぞ、こっちにも被害が出そうだったからしただけだ。」

「ははは、そうですか。
……ん？　貴女はもしかして……、影統べる女王，！！」

「……逃げるぞ！」

「待て！　こちら、〇〇。
高額賞金首を発見。援軍を頼む。」

なんでこうなった。

第十話（後書き）

これから更新ペースが落ちていくかもしれませんが、頑張って書き続けるので、よろしくお願いします。

第十一話（前書き）

遅れましたが投稿です。

更新は遅くなっても、週一位のペースでやっていくので、よろしくお願いします。

第十一話

『さぁ！観客の皆さん！
お待たせしました！
今回は新人（ルーキー）同士の対決です！
ここで華かな初勝利を飾るのか？　それとも惨めな敗北を晒すのか？
それは自分次第です！
いきましょう！　南方！　出身不明　アルファーー！！』

フードで顔を隠したライナが入場する。

ちなみに偽名は、複写眼、アルファ・スティグマだから、アルファだ。

『北方！　奴隷剣闘士　ジャーック・ラカーーン！』

ライナの対戦相手は盾と片手剣を持った少年だった。

可哀想だが、勝負は見えてるな。

『それでは！　試合……開始！！』

シュッ　ドガッ！

試合を説明するとこんな感じ。

開始と同時に瞬動で接近し蹴り飛ばす。

少年は反応する事も出来ずにくらい、恐らく気絶しているだろう。

『え……えっと、ラカン選手、気絶しているようなのでカウントに入らせて頂きます！』

一応、ルールを言っておくと、対戦相手の死亡・戦闘不能・ギブアップで勝利。

気絶・ダウン状態となると、カウント２０で戦闘不能となる。

『１！
２！
３！
４！
５！
６！
７！
８！
９！
１０！
１１！
１２！

あぁーっ！ラカン選手、立ち上がりました！』

ほぉ、立ち上がるか。
中々どうして根性のあるやつ。

しかし、根性だけではどうしようもないわな。

それから少年は、あっさりと２０カウントとられて敗北した。

「ライナの初勝利だが、レベルが低いな。
……非合法の施設にでも放り込んでみるのもアリかもな。
確か、魔力や気を封じた状態で竜種や魔獣と闘わせる地下闘技場なんてのもあったな。
危険度は高いけど、その分金が良かった筈だ。
あいつは寝具を買いたがってたし、金が儲けれる方が良いだろ。」

ククク、楽しくなりそうだな。

その間、暇そうだからあの少年を鍛えてみるのも面白そうだ。
見たところ、才能も在りそうだし、ライナの一撃をくらって立ち上がった根性も気に入ったし。

ククククク、あぁ、本当に楽しくなりそうだ。

あれ？　俺の周りから人が居なくなってるぞ？　なんでだ？

……

「ご苦労さん、ライナ。
レベルが低くて勝って当たり前。敗けるはずが無い試合だけど、一応、初勝利おめでとうとだけは言っておいてやるよ。」

「祝いの言葉の筈なのに、全く嬉しくないのは何ででしょう？　言葉って不思議ですね。」

「ははは。祝う気も、褒める気も皆無だからな。
でだ！　ここのレベルじゃお前の相手になりそうにないから、少ーしだけ、レベルが高い場所に変えるぞ。
そこは登録とかの面倒事も必要ないし、金も高いから安心しろ。」

「いや、別に僕はこのレベルでも満足ですし、今の稼ぎでも十分です。」

「駄目。行くぞ。」

「嫌だーー！
僕は平穏が欲しいんだーー！」

「えぇい、無駄な抵抗をするな！　諦めろ！」

ギャンギャン、鳴き喚くライナに手刀を入れて黙らせて、目的の裏闘技場に連れていく。

闘技場では、一番苛酷な条件のものを選んで、ライナを置いてきた。

契約は一年なので、一年間生き延びたら多額の賞金と共に帰って来るだろう。

ま、そこは剣闘を見るというより、人の死を見るのを主としているようなところだけどな。

俺もおいそれと様子を見に行けないのは残念だ。

ライナはこれで良いとして、あの少年奴隷の相手でもしに行こうかね。

金もあるし、買い取ってから鍛えるか。

楽しみだな、最近はエヴァもライナも鍛えることが無くなってきたし、自分も鍛えるのは難しくなってきていたしな。

人を強くする位しか楽しみがなくなってきたんだよ。

出来れば、俺の相手が務まる位には強くなってほしいな。

さてと、少年は何処にいるのかねぇ？

所属しているところを探せば、すぐにでも見付かるかねぇ？

帝都をぶらつきながら少年を探してみる。

一応、剣闘士が集まりやすい場所を中心に探しているんだが、中々いない。

「やっぱ、酒場には居ないか、帝国は飲酒年齢に制限が無いとはいえ、負けたその日には来ないよな。」

となると、何処にいるんだろ？

「おう、ねぇちゃん。
こんなところにひとりでどうしたよ？
どうよ、おれらといっしょにのまねぇかい？」

「ひゃひゃひゃ、こんな寂れた酒場にこんな良い女が来るとはな。」

うーん、剣闘場の近くでも探してみるか？
奴隷なら、行動範囲なんて限られているだろうし。

「おいおい、むししないでくれよ。」

「相手にされてないだけじゃないのか？
どうだい、ねぇちゃん、俺と遊ばないかい？」

剣闘場に戻ってみるか。

酒場を出ようとすると、突然肩を掴まれた。

「何か用か。」

「さっきから話し掛けてるのに酷いなぁ、返事位してよ。」

「そうだ、いっぱいぐらい、つきあわねぇか？」

「悪いが、用事が在るんでね。
そんな暇はない。」

「そう、言わずに……さあ！！」

強引に引っ張って連れ込もうとしたのだろうけど、生憎その程度じゃびくともしない。

「あ、あれ？」

「はぁ……めんど。」

肩を掴んでいる男達のアゴを裏拳でかすらせる。

所謂、ピンポイントブローだな。

意識ははっきりとしているのに、足に力が入らずに崩れ落ちる。

「なんだ！？　たてねぇ！」

「どうなってるんだよ！」

後ろでまだなんか言っていたが無視して、少年を探す。

……

結果としては、闘技場の近くで少年を発見した。

柱の一つに寄りかかって、三角座りでぼーっとしていた。

うぅむ、なんて話しかけようか？

ナチュラルに自然に話しかけてみればいいか。

「よっ、少年。
見事な負けっぷりだったな。」

……何言っちゃてるんだ俺はーーーー！！

これじゃ、ただの嫌がらせじゃねぇかよ。

うわぁ、恥ずかしい、初対面の他人と自分から話しかけるなんてかなり久し振りだったから、変な事口走った！

「あ、いきなりなんだよ。」

少年は不機嫌そうに返してくれた。

返事があっただけ良かったよ。

「いや、さっきの試合を見ててな。

一度立ち上がったのは凄かったが、結局簡単に負けていた少年が居るなぁ。と、思って話し掛けたただの物好きだよ。」

俺の口はどうしてしまったんだろう？

口走り過ぎて、暴走してるな。

「てめぇ！……ちっ、はぁ……」

一度立ち上がって拳を振り上げたが、すぐに座り直した。

「何も言わないのか？」

「負けたのは事実だからな。
けどな、次戦う時には俺が勝つ！」

やっぱり、こいつは面白くなりそうだ。

「ふむ、少年。
強くなりたいか？」

「あぁ？」

「だから少年。
強くなりたいか？
なりたいのなら、強くしてやるぞ？」

「……強くなれるんなら、強くなりてぇよ。」

「分かった。少し待ってろ。」

「は？」

呆然としている少年を置いて、俺は歩き出す。
目的地は少年が所属している剣闘団だ。

一時間程で戻って来たが、少年は座ったままだった。

「よし、行くぞ、少年。」

「え？　おい、ちょっと待てよ！」

慌てて着いてくる少年。

「そういえば、少年よ。
名前はなんていうんだ？
いい加減、少年はやめたいだろ。」

「今更かよ。
俺は‘ジャック・ラカン’。
最強の剣士になる男だ。」

「そうか、俺は七々己　一希。
こっち流じゃ、カズキ・ナナナナミだが、お前は俺を師匠（マスター）とだけ呼べば良い。」

「へいへい、よろしくお願いします。マスター。」

「ついでに言っとくと、俺は世界最強か、二番目だから。
最強の剣士に成りたきゃ、最低でも俺を超えなきゃな。」

「はっ、すぐに超えてやるよ。
で、何処に行くんだ？」

「ん、とりま、近くの荒野だな。
所で、お前の武器はそれだけか？」

片手剣を指差しながら聞く。

「そうだけど？」

「そうか……流石に厳しいかな？　まぁ、大丈夫か、様子を見ながらにするか。う～む。

よし、ジャック、これ持ってろ。」

核金を投げ渡す。

「なんだこれ？」

「武器が無くなってどうしようもないときは、武装錬金，って言えば武器になるから。どんな武器になるかは、お前次第だけどな。」

「へぇ～」

「んじゃ、始めるぞ。
魔兵召喚。取り敢えず１００体。」

この魔法は召喚と言っているが、闇の魔素を影で編んで造っている影の兵隊だ。
ある程度、自動で戦闘するようにしているので、中々便利だ。

「じゃ、頑張れ。」

「いやいや、この数はおかしいだろ。」

「大丈夫だよ。殺さないように設定しているから、最悪九割九分九里殺しにしかならないって。」

「それ、０，１％しか生きてないーーー！」

第十二話（前書き）

段々とネタが思い付かなくなってきた作者です。

あぁ、原作が遠い。

文才が欲しいと切に願います。

第十二話

「覇王！！　炎…熱…轟竜咆哮爆烈閃光魔神斬空羅漢剣！！」

ドパァァァァン

「技名が長すぎる。決めポーズと合っていないぞ。」

いきなり、失礼。

今、少しラカンの必殺技を考えてる所だ。

「ダメか。」

「もっと、シンプルに行けよ。」

「シンプルに……ルァワカァァァァァンヌッ・ブゥウレィドォ！！」

ドパァァァァン

「舌巻き過ぎだろ。何言ってんのか分かんねぇぞ。」

「でも師匠よぉ、明日が締め切りだぜ。
やっぱ、俺は素手のが強いし決勝も素手でいこうや。」

「それでも良いわ良いんだが……うーん、ちょっと全力撃ってみろや。」

「よっしゃ、行くぞ。くそ師匠！
全力全開・ラカン…インッ…パクトォ！！」

ラカンから放たれる強大な気弾。
それを俺は何をするわけでもなく受ける。

ドオォォン！

「どうだ、くそ師匠、くたばったか。」

「う～む、確かに強い。しかし、強すぎるんだよなぁ。
これ喰らったら、大抵の奴は死ぬよな。
ルール上では、対戦相手の死亡は問題無くともやっぱりなぁ……
…」

俺は無傷ですよ。

服が少し破けたがこの程度なら問題ない。

「くそっ、生きてやがんのか。」

「それに、最初に最強の剣士とか言ってたし、剣技も造っといた方が良いかなぁと思ってな。
あ、それと、くそって言った分覚えとけよ。」

「ぐ、確かに。
剣を使う以上は、剣での必殺技も必要だ。」

こいつ、馬鹿だわ。

「けど、確かにお前の言う通り。
決勝は明日だ。考えている時間ももうない。
それに、この大会を優勝すれば奴隷解放に大きく近付く。
無茶をする場面じゃないわな。
うん、この話しは忘れて、明日に備えてさっさと寝よう。」

「ぬぐぐぐぐぐぐぐぐぐ」

ラカンを置いて帰る。

さてさて、あの馬鹿はどうするかね。

あ、そういえば、ライナはどうなったかな？

この前の闘技場であまりにも受けが良くて、勝手に契約延長手続きをしちまったからなぁ、１０００万Ｄｐ（ドラクマ）稼ぐまで帰ってこれないんだよな。

まぁ、あいつだし、のらりくらりでなんとか生き残ってるだろ。

帰ってこれたらラカンと闘わせるのも良いかもな。

‘この試合に勝てば解放される’って試合にライナと闘わせるとか……。

初めて負けた相手と解放を賭けての試合。

死ぬ気で闘うだろうなぁ。

面白そうだし、考えとこ。

……

そして翌日。

「ふぁ……」

ベッドからのそのそと這い出る。

うぅ、この時期（冬）は布団を出るのが億劫になるな。
寒くはないんだが、何でか布団が恋しくなるんだよな。

うん、俺でも抗いがたい程の恐ろしい魔力を秘めている。

ま、それはそれとして、だ。

「あの馬鹿はどうなったかな？」

顔を冷たい水で洗い。

頭を覚醒させてから、修行場に向かう。

「ぬおぉぉ！！」

まだやってるよ。

「駄目だ駄目だ！　こんなんじゃてんで駄目だ！　どうする！？
だがっっ！　燃えてきたぜっっ！！」

目の下に隈をこさえて黒板の前で燃えている馬鹿。

これはあれだな。徹夜をしたら明け方に妙なハイテンションなるあれだ。

「待てよ……斬撃にこだわりすぎたのがマズかったか……！？」

ダメだこいつ、はやくなんとかしないと。

「止めんか馬鹿が。」

「なんだ、師匠か。
少し待ってくれ。　もう少しで何かが掴めそうなんだ。」

はぁ、こいつはホントに。

「だから、止めんか馬鹿が。」

今度は拳と共に言葉を放つ。

「たわらばっ。」

頭を抑えるが、とにかく止まったな。

「何すんだよ、師匠！」

「お前は試合当日の朝に気を使い果たす気か？
まさか、徹夜するなんて思わなかったぞ。」

悪ふざけで乗せたのは俺だが、ここまで悪乗りが過ぎるとは流石に予想外だ。

「でもよぉ……」

「でももへったくれもあるか！　とにかく休め！　試合は昼からだから少しでも回復させろ。」

「へーい……」

「新しい技はぶっつけ本番で試せ。

主人公気質を持ってたら絶対に使える技を思い付くから。」

「なんだ？　主人公気質？」

「こっちの話だ。気にするな。」

この馬鹿がそれを持ってるかは知らんがな。

「へいへい、それじゃ休んどきますよだ。」

ぶつぶつ文句を言いながらも休みに行く馬鹿。

「さってと、俺は軽く食べる物でも作るとするかね。」

あ、あの馬鹿用に体力回復する食べ物も作ろうかな。

体力回復を最優先にして、味は二の次みたいなので良いよな。

いやぁ、俺って優しいなぁ。

ちなみに出来上がった物を馬鹿に喰わしたら、「がっふぁ！！」と

か言って白眼を剥いていたが、口に残りを詰め込んで呑み込ませたので、ちゃんと体力も回復出来た。

うん、本当に俺って優しいなぁ。

……

そんでそんで、試合開始の時間となり、あの馬鹿と対戦相手である虎の獣人がコロシアムで向かい合っている。

『それでは、ヘラス冬季大会・〇〇杯！！
決勝！北方は僅かな期間ながら！破竹の勢いでここまで登り詰めた男！
奴隷剣闘士・ジャック・ラカーーーンッ！！』

「「「「わぁーーー！！」」」」

『対する南方！　その実力は折紙付き。　新人剣闘士達に立ちはだかる巨大な壁！　ベテラン自由剣闘士！
ニャンドマの狼獣人・ウルフ王っ！』

「「「「「うおぉーーー！！」」」」」

相手、‘ニャン’ドマなのに、‘狼’獣人なんだ。

それに、あの馬鹿より声援が大きいな。そこは流石ベテランと言ったところか。

『さぁさぁ、ルールは皆様ご存知のとおり！！
ギブアップ・戦闘不能・死亡で決着！！
武器・魔法に使用制限なし！！』

『両者位置について……開始！！』

開始と同時に狼獣人は瞬動で接近。

それを馬鹿は回転しながらジャンプでかわし、空中で剣に気を集中させていく。

あの馬鹿……気を集中させすぎだ……

『オラァッ』

馬鹿が投げた剣が地面に触れた瞬間。
音が死んだ。

と思ったら、

ドゴオオオオオン

「うわあ！？」「キャアアア」「うおおおっ」

阿鼻叫喚。その言葉がよく似合う状況になった。

やり過ぎだな。

極音速の投剣と凝縮された気の炸裂……技とも言い難い力業だな。

『す、凄まじい一撃！　てゆーか、ウルフ選手は生きてるのか！？
原型を留めているのか！？』

かろうじて生きてるだろうな。

『あぁー、ウルフ選手、生きているようですが、戦闘は無理のようです。
ということで、勝利っ！！
ラカン選手！』

ま、当然なんだが、あれは剣技と呼べるものなのか？

『早速勝利者インタビューを行ってみましょう！！』

先に帰るとするかね。

しっかし、あいつのあれは主人公気質というよりはただのバグだな。

剣に気を込めて投げるだけであんな威力になるか普通。

特に術式も刻んでない、何処にでもある平々凡々な剣だぞ。

はぁ、まぁ、あの馬鹿は細かい所は全部気合いで済ます馬鹿だからな。

それが今までの弟子とは毛色が違い過ぎるんだ。

はぁ、脳筋を鍛えるのは大変だな。

いっそ、アネリアさんにやらされたメニューをさせるか？

あの脳筋馬鹿ならなんとかやり遂げるだろ。

第十二話（後書き）

決めポーズや名前は技の威力向上に関係するから大人がやるんですよね？

決して、ラカンだけがやることじゃないですよね？

ちなみに、ラカンの対戦相手のウルフ王は原作に名前だけ登場した、ウルフ王子の父親という、特に活かされない設定です。

第十三話

「さて、馬鹿弟子よ。来月の大会に優勝すればお前の解放金は十分にたまるだろう。
これで、晴れて、解放奴隷だ。良かったな、自由になれて。」

「あ、あぁ……」

「そこで、言ってあった通り、今から卒業試験をするぞ。」

「……あぁ。」

なんだその、この世の終わりみたいな顔は。

「ルールは簡単。全力で俺を倒しに来い。
俺はそれを全力……本気で叩き潰すから。」

全力は流石に不味いわな。

「ここまで来たらやるしか無いのか……。」

覚悟を決めた顔をする馬鹿。

そういえば、この馬鹿に修行をつけ始めてからもう八年になるんだな。

今では俺を越す身長になり、おまけに筋肉達磨になんかなってしまって。

まぁ、今回はあくまで卒業試験だ。

こいつの好きなド突き合いでもしてやるかな。

「それじゃあ、始めるぞ。

合図はこのコインが地面に落ちたらだ。」

ピンッ、と指でコインを弾く。

ゆっくりとコインが落ちてゆき、地面につくと同時にお互い接近し殴り合う。

馬鹿、いや、ラカンは気で強化し、俺は素の身体能力だが、構わず、全力で殴り続ける。

片方の頭が弾かれれば、お返しとばかりにもう片方の頭が弾かれる。
ゴッ、ガッ、と硬質な音を出しながら殴り合う俺達。
技術も何もない、真っ向からの殴り合い。

「くっくくく……」

真っ向からか、素の身体能力とはいえ、真っ向から俺と殴り合う事が出きるのか。

「はは、ははははは！！」

面白い。本当に面白く育ったものだ。

「どうした、こんなもんじゃないだろ！」

「ぐ、ぬおぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

……

「はぁ……はぁ……楽しかったぞ。

文句なしの合格だな。」

「ハァ、ハァ、ハァ、ここまで、ボコボコに、されて、合格、なんて、言われても、嬉しく、ないぞ。」

大の字で寝転んでいるラカン、息も絶え絶えながらも悪態を吐けるなら、大丈夫だな。

「くくく……それじゃ、俺は行くとするか。
次に会うときにどうなってるか楽しみにしてるよ。」

「次は、必ず、ぶっ飛ばしてやる！この、くそ師匠！」

「それもそれで楽しみにしておいてやるよ。」

寝転んだままのラカンを置いて、歩き出す。

さて、どうするかね？

戦争は帝国についてやるけど、それまではどうするか、世界を放浪するのも良いかな。

メガロメセンブリアには正義馬鹿が多いから、面倒だし。

うーん、学術都市であるアリアドネーで俺の能力について研究するのも良いな。

あそこは、学ぼうとする意志と意欲を持つ者なら、例え死神だろうが悪魔だろうが受け入れる。という所だからな。

でも、世界を放浪とかはしなさそうだな。

う～む、どうするか……

ま、今はいいか、とりあえず帝都で買い物でもしよ。

流石に、着流しを着て行ったら、場違いだろうし……今でも少し、浮いてるしな。

でも、服はなぁ、ファッションなんて気にした事ないし、店員におすすめの聞いてそれにすれば平気だろ。

服と食糧……後、要るものなんて在ったかなぁ？

適当にこれからの事を考えながら、帝都の服飾店を探し歩いた。

ガイドブックを見ても良いんだが、店を探すのも買い物の醍醐味の

一つだと、俺は考えている。

時間がある時限定だが。

しばらく探していると、面白そうな店を見付けた。

少し、入り組んだ路地の中にあり、薄汚れた印象を受けるが、中からは強力な魔力を感じる。

隠れた名店のような雰囲気を漂わせるその店に、とてつもない興味が沸いた。

「ここにするか……いや、むしろ、ここしかないな！！」

店の前で、大声を出して何してるんだろ……俺。

気を取り直して、入るか。

ガチャ

「お帰りなさいませ、ご主人様♪」パタン

俺の目はどうかしたのかな？

エプロンドレス、所謂メイド服を着ている人が見えたような気がするんだが？

ここは服飾店で間違いないよな？　秋〇原で有名な某喫茶店では無

いよな？

ふ～……落ち着け。

きっと気のせいだ。

もう一度、よく見ればなんてことはない変わった服の店員さんがいるだけだ、決して、メイドや侍女なんか居やしなかった筈だ。

よしっ。

ガチャ

「「お帰りなさいませ、ご主人様♪」」バタン

……増えてたーーー！！

え？　なんで？　なんで？　二億年以上生きててこんな事は始めてなんだけど。

いやいや、落ち着け、深呼吸だ、深呼吸。

たかが服屋に入ったと思ったら、いきなりメイド服を着た女の子に深々と頭を下げられて、お帰りなさいませ、ご主人様と言われただ

けで、珍しく無いことの筈なんだ！

いや、本当に落ち着け、珍しく無いことの筈が無いだろ。

訳が解らなくなって、思考が支離滅裂になってしまっているんだ。

一から、順番に考えていけば大丈夫だ。

えーと、まずは何処から思い出せば良いんだ？

これからどうするか考える。
←
買い物をする事に決める。
←
良い店がないか物色する。
←
面白い店を発見する。
←
店に入る。
←
「お帰りなさいませ、ご主人様♪」
←
パタン
←
？？？

←
もう一度、入る。
←
「「お帰りなさいませ、ご主人様♪」」
←
増えてるーー！↑今ここ

うん、順番に思い出しても意味不明だ。

……でも、入るしか無いよな。

ガチャ「「「お帰りなさいませ、ご主（バタン！）――――」」」

また増えてた……

ここまで来たら、どこまで増えるか見てみたいとも思えるな。

ガチャ
「いい加減にしろや、ごらぁぁぁ！！」

「うぐぅあ……」

キレの鋭いハイキックが綺麗に俺の側頭部に決まった。

「まさか……俺が……反応も出来ない……とはな……」

世界の広さを痛感した瞬間だった。

いや、それよりも、俺の行く世界では理不尽な強さの女性は必ず要るものなのか？

「というわけで、言い訳位は聞いてあげますよ？」

「そのぅ、気が動転したというか、メイド服を着た人が二人や三人突然増えて、びっくりしたというか……」

今、俺は「ごらぁ！」と言いながらハイキックを決めたメイドに尋問されている。

「それで、何度も開けては閉め、開けては閉めを繰り返したんですか？　いっそ、私がお客様を締めて差し上げましょうか？」

怖い。

ただそれだけです。

「あの、たくさん買い物するんで、許してもらえませか？」

「姉さん、こう言ってるんだし許してあげたら？」

「けどねぇ……」

「そうだよ、せっかくのカモ……じゃなかった、金づる……でもなかった、お客様なんだから。」

ん、変な鳥の名前が入ったような？

「分かったわ、あ……じゃなくて、お客様、どの様なものをお探しですか？。」

「えっと、スーツと普段着を何着か、上から下まで一式を揃えたいんだけど。なにかオススメとかあるかな？」

「そうですか、分かりました。ショウ、ソウ、案内してあげて。」

「「了解」」

二人に案内されて、服の展示されている所に行く。

ちなみに三人は恐らく三つ子で、全員同じ顔で同じ服（メイド服）だ。見分けが全くつかない。

「まずはスーツからですね。そういえば、お客様のサイズは？」

「サイズか、よく考えれば測ったこと無いな。」

スーツとなると、ちゃんと採寸しとかないとだな。

「採寸とかは出来るのか？」

「出来ますよ。するならこっちの部屋です。」

「頼むわ。」

採寸する部屋に入ると、店員の一人はメジャーを取りに奥に行ってしまった。

「今の内に服を脱いでおいて。」

「え、服脱ぐの？」

「当然。女同士なんだから恥ずかしがることもないでしょ。」

「……俺は男だ。」

「え？」

なんか懐かしいな、この反応。

最近は間違えられることも減ってきたのに。

そのまま、メジャーを取りに行った子が帰ってくるまでの数十秒間。
俺は話さず、相手も固まったまま過ぎていった。

「すいません、探すのに手間取っちゃって、て、どういう状況ですか、これ？」

メジャー片手に戻ってきた子の疑問も至極当然だろう。

「えーと、ショウ、どうしたの？　大丈夫？」

「ソウ姉、ちょっと。　この人男だって。」

「え？　本当？」

「うん。嘘は言ってないみたいだし。」

「うーん、ショウが言うんなら確かだろうけど……採寸はどうする？」

「流石に男の人は無理。」

「だよねぇ。」

「コト姉呼ぶ？」

「姉さんなら大丈夫だろうけど……今は書類仕事してるんじゃなかったけ？」

「あー待て待て。それなら手はあるから。」

影で、真っ黒な俺の分身を作り出しながら言う。

「これは俺と全く同サイズの影分身だから、これを測れば良いだろ。」

「お〜。」

「便利。」

「「では！」」

そそくさと影分身を採寸する二人。

「うわ、腕細っ！」

「腰も……負けた……」

影分身が良いように弄られ、助けを求めるような目でこちらを見ているような気がしたが、無視した。
てゆうか、影分身に目はないし。

「採寸終わりました。

それじゃ、スーツからで良いですね。」

「そうしてくれ。」

こうして、俺はスーツ（黒）を上下二着、（白）を一着。
普段着用に、ジーパンとシャツ、上着等々を複数購入した。
ここの服は魔力がうっすらと込められており、見た目よりも頑丈に出来ていて、中々の防御力を誇っている。

「アリアドネーに行く前の準備はこれぐらいで良いかな。
忘れ物も特に無いだろ。」

……

「先生ー！　僕の事、忘れてないですよねー！」

「グゥオオオオオオ！！」

「っあ、‘闇の吹雪’」

『またまた、勝利しましたR。早速次の魔獣逝きましょう。』

「ノォオオオオオオオオオオ」

……

無い……よな。

うーん、改めて考えると何かを忘れているような……

何だったかな？　思い出せないって事は対して重要な事じゃ無いって事だよな。

……

「だから、僕の事ですよー！」

「どこに向かって叫んでやがる！　てめえの相手は俺様だろうがっ！！」

『猛然と襲い掛かるK。それに対してどうするR？
つーか、どっちでも良いからさっさと殺せよ。』

「ちょ、なんで実況がそんな投げ槍に！？」

『うるせぇ！　てめえらは魔獣相手でも無傷で勝っちまう馬鹿ども何だよ。
内の闘技場の為にどっちでも良いからさっさと殺られろ。』

「そんな殺生な。先生ー！　早く迎えに来てくださいー！」

「死ねや餓鬼がぁ！！」

「あぁ、もう、‘雷の暴風’」

『おっと、大呪文である‘雷の暴風’が決まった。
これは真に残念ながら、Ｒの勝利。
そして、今日のＲの試合はこれまでです。
敗れて黒焦げになったＫには素敵なその後が待っているので安心して下さい。』

「もう、嫌。
報酬もそろそろ貯まった筈なのに。先生ー！　僕の事覚えてますよねー！」

……

「本当に何だったけなぁ？
頭の片隅に何か引っ掛かるんだよなぁ。」

第十三話（後書き）

三つ子メイドを出したかっただけです。
後悔も反省もしていません。

三つ子メイドの名前の由来は日本の古典楽器からとっています。

琴、箏、諍。

次回からは場をアリアドネーに移します。

主人公の影魔法と、神様印の能力を合成させて新しいものを作り出す。予定。

第閑話（前書き）

クリスマス番外編です。
時系列等はおかしいですが、番外編と云うことで許して下さい。

第閑話

突然だが、今日はクリスマスの前日。つまり、クリスマス・イヴだ。

といっても、おれはキリスト教でもないし、イエス・キリストなんかよりも、遥か昔から生きているような存在だ。

そんな行事など、関係ないし、有って無いようなものだ。

それは、不老であるライナも、真祖の吸血鬼であるエヴァも同じだと思っていた。

そもそも、クリスマスの風習等、ほんの最近知ったばかりで、ヨーロッパ出身の二人も、聖誕祭としての印象の方が強い筈だ。

なのに……

「なぁなぁ、父様。
明日は雪が降るかな？
靴下も用意したんだがこれで良いよな？」

目をキラキラと輝かして、片方の巨大な（それこそエヴァがすっぽり入るような）靴下を持ちながら外を眺める、齢６００のこの幼女

はどういうつもりだ？

「なあ、エヴァさんや、その大きめの靴下はどうしたんだ？
そんなものはこの家に無かった気がするんだが。」

「ん？　これか、これは私の手作りだ。
サンタさんは靴下にプレゼントを入れてくれるらしいんだ。」

サンタさんの存在を信じていらっしゃるようです。

いや、居るよ。信じてる子のもとにはきっと来るよ。安心してね。

「そうか、そうか。」

しかし、どうするか……近頃のエヴァはなんとなくそわそわしている
るような気がしたが、どうやらクリスマスが原因だったみたいだな。

「で、どんなプレゼントをサンタさんに頼んだんだ？」

これが分からないと、俺もプレゼントを用意出来ない。今の時刻は
ＰＭ５時だから、急げば買いに行けるだろう。

娘が楽しみにしてるんだから、出来れば叶えてやりたい。例え、齢
６００の吸血鬼でも。

「ふふふ……それはだなぁ……秘密だ。」

指で口許隠しながら言うエヴァ。可愛いが、それじゃあプレゼントを用意出来ないんだけど。

「あ、そうだ、そろそろ予約しておいたケーキを買いに行かないと。」

パタパタと出掛ける支度を始めるエヴァ。

「むぅ……」

プレゼントをどうするか……ライナに最近エヴァが何を欲しがってる聞いてみるか。

嗚呼、こんな事ならば、もっと親子の会話をしておくんだった。

「エヴァの欲しいモノですか？」

「そうそう、ついでにお前も欲しいモノが在ったら言っておけよ。」

「僕はもう子供じゃないから良いですよ。」

「俺にとっちゃいつまで経ってもお前らは子供だよ。」

「はぁ……まだまだ子供扱いですか……それより、エヴァの欲しいモノですか……確かこの前、町に出た時にあった店の服を欲しがっていたような。
珍しい店と服だからよく覚えてますよ。」

「おぉ、それは何処だ？」

「えっと……」

簡単に店の名前と服の特徴を聞いてメモをとっておいた。

「ふぅ……で、お前の欲しいモノはなんだ？」

「欲しいモノは……平穏？」

「却下」

「うぅ…うぅ…だろうと思いましたよ……」

チャチャゼロにも一応聞いとくかな。
役に立つかは別にして。

「オウ、旦那ガ来ルトハ珍シイジャネェカ。
俺ニナンカヨウカ？」

「あぁ、最高級ワインをボトルで一本出すから、最近エヴァが欲しがってるモノを教えてくれ。」

「ケケケ、気前ガ良イナ。ソングライナラ教エテヤルヨ。但シ、ワインハ忘レルンジャネェゾ。」

「分かってるよ。で、」

「アァ、御主人ノ欲シイモノダッタナ。
御主人ハ最近発売サレタウサギノヌイグルミヲ欲ガッテタゼ。
結構、高イモノデ御主人モアキラメテタヨ。」

「ウサギのヌイグルミね。」

服かヌイグルミか……どっちも買えば良いか。

買うモノも決まったから町に繰り出す。
服屋も目星は付いてるし、ヌイグルミも百貨店にでも行けば売っているだろ。

百貨店でお目当てのヌイグルミを見付けた時、あの靴下のサイズに納得がいった。

「デカイな。」

高さが１３０センチもある巨大なウサギのヌイグルミ。
全体的に白いモコモコだが、アクセントとしてなのか、片目を包帯で隠している。

「値段は……三万五千……確かにそこそこの値だが……このサイズじゃな。あ、ついでにこれも……」

別に値段が幾らでも買うことに変わりはないので、さっさと買って、人目の無い場所で影にしまう。

次は服だな。

ぱぱっと買って早く帰るか、エヴァが戻ってたら、面倒だ。

服屋もすぐに見つけ、すぐに服を買って、影にしまって終わらせた。

よし、帰るか。

「ただいま〜」

「お帰りなさい、先生。
ありましたか？」

「うん、あったあった。エヴァは？」

「まだ、戻ってきてませんよ。
ケーキ店は遠いですし、歩きだと後、１５分は掛かるんじゃ無いですか？」

「そうか……そんじゃ、どうするか……ライナ、チェスでもするか？」

「先生とチェスをしても勝負になりませんよ。」

「良いだろ、所詮暇潰しだ。」

「はいはい。」

それからエヴァが帰って来るまで、チェスを続ける。
結果は何回も対戦しているから解りきってるが、それでも暇潰しにはなる。

「ただいま！」

決着が着いたちょうどのタイミングで玄関から声が聞こえた。

「帰ってきたか……お帰り、エヴァ。」

チェスの結果は引き分け。
ライナの言った通り、勝ちも負けもなく、勝負にはならなかったな。

「父様！ライナ！外だ！外を見てみろ！」

「ん……ほぅ……」
「へぇ……」

窓から見た外では、ハラハラと雪が舞っていた。

「これで明日はホワイトクリスマスだな！
早く靴下を準備しないと。」

ケーキを冷蔵庫に入れてから、自室に駆け込んで行くエヴァ。

俺とライナはそれを見送る事しか出来なかった。

「なんて言うか……チビっ子の元気って凄まじいな。」

「ですね。」

そして、夜も更け、エヴァが寝静まったのしっかりと確認してから、
完璧に気配遮断をし、エヴァの部屋に忍び込む。

物音一つ起てずに近付き、影に入れておいた服とヌイグルミを靴下
に入れる。

ちらっと、エヴァの様子を伺うが、ぐっすりと眠っているようだ。

バレないように夕食に仕込んでおいた睡眠薬がよく効いてるようだ。

チャチャゼロの前にも、俺謹製のナイフを置いてと。

ゆっくり、入ってきた時と同じように、物音一つ起てずに部屋を出る。

部屋を出て、扉を閉めてから一息吐く。

「ふぅ……ミッション完了だな。」

これを毎年か……世のお父さん、お母さんは偉大だな。

「次はライナだな。
ヌイグルミのついでに枕と目覚まし時計を買っておいたから、目覚まし時計の時間を朝七時にセットして、と。
よし、行くかな。」

翌朝。
早朝から起こされた為、どこか目が虚ろなライナ。
靴下に入れておいたゴスロリの服を着て、自分と同じ位のヌイグルミを抱えたエヴァ。

新しいナイフを振り回して俺に斬りかかってくるチャチャゼロ。の三人を見ることが出来た。

そして何より、俺の枕元にもプレゼントが置かれていた。

プレゼントは二通の手紙。

送り主は……言わぬが花だろう。

その日のクリスマスは家族揃って楽しく過ごした。

第閑話（後書き）

エヴァのキャラだと、クリスマスとか楽しみにしてそうですよね。

ヌイグルミを抱えたエヴァは普通に想像出来てしまい、こうしました。

第十四話

ハロー、一希だ。
今はクリスマスとは何の関係もなく、本編に戻ったから、前話については忘れてくれ。
ん？　俺は突然何を思ってるんだ？

それらはこの際置いておいて、話を戻そう。
只今俺は、アリアドネーの総長と交渉している真っ最中だ。

「では、貴方には影魔法の講師をしながら研究をしていく。という事で良いですね？」

「それで十分です。後、こいつは助手ですんで、よろしくお願いします。」

「よろしくお願いします。」

イヤー、危なかったなぁ、帝都を出る直前にライナの事をやっと思い出して、あの闘技場から引き取ったんだよ。
１０００万Ｄｐという大金を抱えてな。

まぁ、こいつも最初はとてつもなく機嫌が悪かったけど、帝都の寝具を買い漁ってたら直ぐに機嫌を直したからな。

全く、馬鹿……御しやすい奴だ。

「住居は、教員用の寮がありますから、そこを使ってくださいね。授業に関しては、他の先生との兼ね合いがありますから、少し時間が掛かりますが、研究は空いている研究室を使ってすぐに始めてもらっても構いません。ただ、危険な実験等をする時は、事前に連絡をいれておいて下さいね、それと――――――」

その後、延々とここでの生活の注意事項を聞かされた。

話が終わると、アリアドネー内の地図や、授業や寮についての資料を渡された。

何故、資料を渡すのにあんな細々とした注意事項を全部言っていたんだ？

老人によくある、やたらと会話をしたがるあれか？

余談だが、アリアドネーの総長はもう結構な歳で、近々引退するんじゃ無いかと噂されているらしい。

入ってきたばっかりの俺の耳にも入ってくるぐらいだし、実際に総

長を見ると、その噂も嘘とは言えないだろうな。

「――――以上ですが、何か質問はありますか？」

「いや、特には無いですね。」

「僕もありません。」

「そうですか、それならナナナナミ先生。
改めて、これからよろしくお願いしますね。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

差し出された手を握りながら、こっちも笑顔で答える。

総長室を出ると。

「あんたらが新しい先生かい？」

中学生位の男の子が突然話し掛けてきた。

今さっき、講師になったばかりなのに、この学校は噂が回るのが早

いな。

「どうなんだ。総長室から出てきたということはそうなんだろ。」

少し考えていたら、無視する形になってしまったようだ。

とりあえず、返事はしといた方が良いだろう。常識的にも。

「あぁ、そうだよ。
俺は、ここで研究員兼講師をすることになった七々己先生だよ。
で、君は生徒の様だけどだけど、何か用かな？
生憎と授業もしていないから、いきなり話し掛けられて質問されるようなことはないはずだけど。」

「違ーよ！おれはここの研究員だ！
見た目はこんなだけども、生徒なんて年齢じゃねぇんだよ！」

「おっと、これは失礼。つまりは先輩でしたか。」

「そういうこった。おれは総長にお前の案内を頼まれたんだよ。」

「それはそれは、よろしくお願いしますよ。先輩。」

「解ったなら良い。なら、着いてこい。
寮と空いている研究室迄は案内してやる。後、アリアドネー内での資料に書かれていない暗黙の了解についてもな。」

「あいあい、委細承知ですよ。先輩。」

あ、なんとなくライナやラカンが俺の事を‘師匠’やら‘先生’って言い続けるのが分かった気がする。

こうなったら、言い方を変えるに変えられない。
別に分かったからどうということもないけど。

「ところで先輩は何の研究をしてるんですか？」

敬語は苦手だな。

会話がないと辛いかと思って話し掛けたけど、何年も敬語を使ってなかったから違和感ありまくりだ。

「あ？　突然、なんだよ。」

「ちょっと気になりましてね。先輩はどんな研究をしてるのかなっと。」

話題の振り方は変だったかもしれないけど、内容としては普通だろ。

「……言っても問題は無いか……

まぁ良いだろ、教えてやる。おれの専門は雷系だ。

それの新たな使い方について研究している。

具体的には、傷口付近の細胞に電気刺激を与え、新陳代謝や細胞分裂を活発にさせ、傷を回復させるんじゃなくて再生させる……とかだな。」

「……それは凄い事ですけど、寿命が縮むんじゃないんですか？」

確か、人間の細胞分裂の回数には制限というか限界があった筈だ。

それを電気刺激で強制的に活発にするということは……

「死ぬよりはマシだろ。」

「さいですか。」

なんともシンプルな考え方のようだ。

……

「ここが研究室だ。
前に使ってた奴の痕が残ってるが、研究に影響が出るようなら自分で何とかしろ。
置いてある備品は最低限の物だが、自由に使って構わないから。」

「後って言うか……」

壁四面に描かれた意味の分からない言葉の羅列。
十字架や松明？　巨大な眼球、人間のようなモノの絵。
床や天井にも、色彩鮮やかな曼陀羅や幾何学的な魔法陣が、所狭しと刻み込まれている。

「前、ここを使ってた奴は何を研究していたんだ？」
それにどうやって色を刻み込んだんだ？
足の感覚からして、特に凸凹はしていないが……

「ここの前任者はな、宗教と魔法との結び付きについて研究していたんだよ。」

「それが何で、こんな部屋に？」

「流石にそこまでは知らんが、奴は神を体現させるとか言ってたな。最終的には狂信者みたいになって、生徒を生け贄にしようとしたのが発覚して、アリアドネーを永久追放されたがな。
全く、教職者が狂信者になるなんて、だじゃれとしても笑えねぇ。」

「フッ……」

「鼻で笑うな。鼻で。おれも面白いとは思ってねぇよ。」

「結局、この部屋は良く分からない宗教信仰心が燃え上がった燃えカスと云うことか。結構、上手くね。」

「フッ……」

「鼻で笑われた！」

「それより、ここの研究今からお前の物だ。学園に迷惑をかけない範囲なら自由しろ。
次は寮だ。
行くぞ。」

「はいはーい、了解しまたした、先輩。」

……

「お前の部屋はここだ、キーも中にある。
ある程度の家具は揃ってるが、必要な物があるなら自費で揃えろ。
まぁ、独り暮らしする分には大丈夫だとは思うが。」

「はいはい、了解。
……あれ？　独り暮らし？　そういえば、ライナは？」

「ライナ？　総長室の前で一緒にいたガキか？」

ガキか、多分先輩よりも歳は上だと思うけど。

「多分それです。」

「そいつなら……研究室にも居なかったぞ。
むしろ、最初から着いてきてなかったぞ。」

「……はぁ、別に良いか。
ほっといても、何とかするだろ。」

「良いのかそれで？」

「大丈夫ですよ。生命力と順応力は図々しい位高いですんで。放任主義とでも思って下さい。」

「じゃあ、おれは自分の研究室に戻るから、後はお前でなんとかしやがれ。」

「はい、先輩も研究頑張って下さいね。」

手を降りながら帰っていく先輩。

白衣を身に纏っていても、やっぱり、中学生位にしか見えない。

「しかし、雷を治癒に利用する。か……モノは考えようだな。あの人もかなり凄い人物なんだろうな。」

俺も、本腰入れて研究するかな。

神に貰った能力になんて頼らずに戦っていきたいしな。

遊びでは能力を使うが。

～～～～おまけ～～～～

その頃のライナ。

アリアドネー内のとある学校のとある中庭。

地面には芝生が引かれ、建物の隙間からは心地好い陽光が射し込んでいる。

そんな場所で、ヘラス帝国帝都ヘラスで購入した最高級品である枕を使い、惰眠を貪っている男がライナである。

「むにゃむにゃ……まだまだ…食べる……」

ベタだ。

最近はもう聞くことが無いほど、ベタな寝言だ。

「むぅ……ふぁんだ？　ふぅあ～……」

欠伸混じりだが、何かを感じ取り、目を覚ましたようだ。

「ちょっと、どういうこと！？
あなた、何でこんな所で寝てるの！！」

怒鳴るように質問するのは、頭に大きな角を生やした白人系の少女だった。
年齢は、ライナの見た目と同じ位だ。

「君は？」

身を起こすこともなく、尋ねる、ライナ。

「私はセラスです！……じゃなくて、何で！　あなたはこんな所に寝転んでるんですか！」

「日射しも気持ち良いし、芝生も気持ち良い。
昼寝には持ってこいの場所だと思わない？」

「そうじゃなくて、今からここは私たちのクラスの飛行訓練に使うんです。」

ライナが、少女の後ろを確認すると、４０人程の女子生徒がいる。

「それは悪かった。別の場所で寝ることにする。」

「待ちなさい。」

立ち上がって、別の場所に向かおうとするが少女、セラスに止められる。

「何？」

「あなたが何処の学部かは知りませんが、今は授業時間のはず。堂々とサボり発言をされたのをみすみす見過ごす訳にはいきません。」

「はぁ……」

やれやれとばかりに首を振りながら、ため息を漏らす。

「何ですかその態度は！
あなたもアリアドネーの学生ならもっと向学心をですね！」

「委員長ーー。もう良いじゃん。ほっときなよ。」

「ガレット、しかしですね。」

「ふっ！」

セラスの目が同級生の方を向いた瞬間、ライナは瞬動、虚空瞬動を併用し。

「まったく……なっ！　居ない、消えた。」

屋根の上まで移動した。

「厄介そうな人に目を点けられたな……ふぁ～……静かなとこ探そ。」

欠伸をしながら、枕を片手に屋根から屋根へと跳び移っていった。

一方、突然目の前から消えられたセラスはというと。

「なんなんですか、あの男は！　次に会った時は――「委員長ーー。先生来たよーー。」あっ、分かりました。」

何故か燃えていた。

この後、アリアドネー内でライナとセラスの鬼ごっこはしばらくの間名物となるのだった。

第十四話（後書き）

セラスの性格が大変なことになってる。

でも、大丈夫ですよね？

若さ故のなんとやらで、生徒時代から原作のような性格している訳ないですよね。

それはそれとして、ライナのヒロイン的な立場としてセラスは登場しました。

これからも段々と原作キャラを登場させる予定なので、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6856y/

葱間・トリップ

2011年12月27日21時58分発行